

令和7年度

研究紀要

第27号

河北町教育研究所

令和7年度 河北町教育研究所 研究紀要

1	研究紀要の発刊に寄せて	3
2	あいさつ	4
3	令和7年度河北町教育研究所<概要>について	5
4	教育研究所組織運営機構図	7
5	研究部会	8
	（1）授業改善部会	9
	（2）児童生徒理解部会	11
	（3）特別支援教育部会	13
	（4）教育行財政部会	15
6	専門部会	17
	（1）学力向上対策部会	18
	（2）生徒指導部会	27
	（3）特別支援学級部会	29
	（4）保健部会	31
	（5）幼小連携部会	33
7	公開授業研究会（河北中学校）	35
8	学校研究	40
	（1）西里小学校	41
	（2）溝延小学校	43
	（3）谷地中部小学校	45
	（4）谷地南部小学校	47
	（5）谷地西部小学校	49
	（6）北谷地小学校	51
9	あとがき	53

研究紀要の発刊に寄せて（創る授業の実現のために）

河北町教育委員会教育長 板 坂 憲 助

「河北中だより」（令和8年1月30日号）に「未来の授業を語る会～生徒が授業について考える～」の記事が載っており、その主な内容が「授業について自由に語り合う中で、今年度学校研究で取り組んできた『問い』『問い返し』という言葉が出たり、生徒自身が『受ける授業』から『創る授業』にしていきたいなどの言葉が出たり、有意義な時間になりました。」とありまさにこれから求められる授業像が話し合われたと感心したところです。

今、学校教育に求められていることは、子ども達に社会の変化に対応し生き抜く資質能力をつけることです。これまでの学習観、知識注入型で唯一解を求める授業パターンから、様々な事象と接しながら、課題を見つけその解決への道筋、構想を立て、協働的な学びを通しながら、最適解を求める学習能力が求められています。先の河北中生が求めている「受ける授業」から「創る授業」のことであります。

これまで我が町では、未来を生き抜く子ども達の学びの舞台となる“学校のあり方”について検討を重ねて参りました。今ある各学校の教室は、大正・昭和時代からの南向きに窓を配し、黒板を中心に一方向に机を並べて、教師の説明を一斉に聞く形です。今、私たちが取り組んでいる令和の日本型学校教育では、個別学習や協働学習、探究的な学習、最新のICT機器を備えた学習空間等、学習内容や学び方に応じて柔軟に対応できる学習空間でなければなりません。更には、子ども達の多様性に応えられる空間、いわゆる個別ブースやクールダウンスペース等が必要であります。他にも、防災機能を備えた学校、地域に開かれた学校、インクルーシブ教育を推進する学校、小中一貫教育が推進できる学校等、様々な面から考慮した学校整備に関する「基本構想・基本計画（案）」が策定されたところです。

子ども達にとってより良い教育環境、教育効果を最大限に引き出す未来永劫の学校づくりは、待ったなしの喫緊の課題であります。重要なことは、教師自身のこれまでの指導に対する当たり前や学校のあり方に対する当たり前を再考し、未来を見据えた新たな当たり前を創造することです。最後にご指導頂きました先生方や全所員の皆様に感謝申し上げますと共に、大いに語り合いながら生徒が望む教師と共に「創る授業」の実現を果たしたいものです。

あ い さ つ

河北町教育研究所 所長 原田正明

今年度から第7次山形県教育振興計画（7教振）がスタートしました。『ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり』を目標に、新たな試みとして、目標の実現のために「県民みんなでチャレンジ」として『体験』『探究』『尊重』『協働』の4つの重点的取り組みを掲げています。特徴的なのが子どもたち、家庭（保護者、家庭の皆様）、地域の大人（地域、企業・NPOの皆様）の視点でこの「県民みんなでチャレンジ」がまとめられていることです。それぞれが自分事としてとらえ、挑戦していくことがウェルビーイングにつながるというもので、これまでの振興計画とは大きく異なります。それぞれの学校においても、これまでの考えを転換し、7教振に沿った取組みを始めようと模索した1年だったのではないのでしょうか。ぜひ、学校だけで完結しようとせず、子どもたち、家庭、地域の大人を巻き込んで、様々な取組みを仕組んでいきましょう。

さて、本研究所は今年度、町の抱える様々な課題や小学校統合を見据えて、事業内容を大きく変更しました。まずは、夏の半日研修を町内の教職員が一堂に会し、実施することにしました。町内の教職員が、教育委員会や教育研究所の方針を知り、ベクトルを同じにして、町内の子どもたちの教育を担うことはとても大切なことだと改めて感じました。また、小小連携の視点から、各小学校の同学年の先生方が集まり、授業について情報交換をする時間をとりました。町内の小学校も児童数の減少で単学級や複式学級が多くなり、同じ学年の先生に相談できない状況にあった中での実施でしたので、情報交換はもちろん、その後の授業研などでもその効果が表れたと思います。コロナ禍以降、なかなか直接会って情報交換をしたり、相談したりする機会が減っていましたが、やはり、直接会って話をすることの意義を感じることができたのではないのでしょうか。さらに中学校は谷地高校の黒木晃校長を講師に、高校入試改革について学習する機会を設け、教職員の理解を深めました。その結果、今年度の3年生のうち半数を超える生徒が前期特色選抜に挑戦しました。

また、今年度の公開授業研究会は河北中学校で実施し、音楽（1年）、道徳（2年）、社会（3年）を公開しました。研究テーマを「生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成」をかかげ、視点として「表現力を高める言語活動の工夫」として研究を進めてきました。事前研究会も複数回行うなど、全校体制で研究を進める中で、「問い返し」をキーワードにした授業づくりを行いました。2学期始業式には全校生徒に対し、研究主任が学校研究について説明し、生徒と一緒に創る授業を目指しました。研究会当日の授業では、義務教育9年間のゴールの姿を町内全教職員が参観することで、それぞれの学年でどのような資質・能力をつけなければならないか考えるきっかけになったのではないかと思います。本町としても、学力向上と授業改善という大きな課題を抱えております。町教育委員会も若手教員の授業力向上のために、『授業について考えよう会～算数編～』を毎月実施（任意参加）し、指導主事の先生方と一緒に勉強する機会も設けていただきました。町教育研究所としても、これからも町教育委員会と連携しながら、様々な課題に対応しながら、河北町の子どもたちの育ちを支えていければと思います。

最後になりましたが、本研究所の様々な活動を実施するにあたりご指導いただきました講師の皆様、そして、ご支援ご協力をいただきました村山教育事務所、町教育委員会はじめ関係各位に心より感謝申し上げます。

令和7年度河北町教育研究所<概要>について

2025.4.1 河北町教育委員会

<第8次河北町総合計画>

「輝く人・町 夢と未来へ挑戦するまち」

<第7次山形県教育振興計画>

「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる
持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」

<第2次河北町教育振興計画（後期） 基本目標>

ふるさとに学び、互いに高め合いながら いきいきと未来をひらく人づくり

河北の人、自然、歴史、文化のよさに浸り、ふるさとを愛する心を養うとともに、町民が生き生きと学び合い、高め合いながら、次代を担う人材を育成します。

今年度も、幼児教育や高校教育の実践にも触れてみましょう。

令和7年度のテーマも「幼小中高連携」

<組織と活動計画>

	部会名	主な内容	期日
研究部	授業改善部会	全国学調の結果を生かした授業改善等	7/31 (夏の半日研)
	児童生徒理解部会	生徒指導の4つの視点を生かした学級経営、いじめ・不登校の未然防止等	
	特別支援教育部会	通常学級における特別支援教育、切れ目ない支援等	
	教育行財政部会	学校間の連携を強める支援体制等	
専門部	学力向上対策部会	実態を踏まえた育成したい資質・能力等	6/20・11/19
	生徒指導部会	不登校の未然防止、引継ぎの在り方等	7/9・12/2
	特別支援学級部会	保護者ととともに歩む支援の在り方等	5/24
	保健部会	喫煙、SOSの出し方等教育課題に対する対応	10/23・1/22
	幼小連携部会	幼小架け橋プログラムの推進等	6/30・11/25



R6 新設しました。幼稚園・こども園の担当者も参加し、互いの授業・保育の様子を参観します。子供の学びの姿について語り、スムーズな幼小の接続の在り方を考えます。

昨年度の取り組み・研究紀要はこちらから ⇒⇒⇒



※このほか、事務局会、運営委員会が年2回ずつ行われます。

<学校間交流>

- ・町委嘱公開授業研究会 河北町立河北中学校 11月12日(水) 全所員参加
- ・各学校校内授業研 年1回は、他校の授業研に参加し、子どもの姿で語り合おう。
※学校の実態に合わせて、低・中・高学年部会や教科部会から代表者が参加し、校内で共有するなど工夫をお願いします。裏面も **Check!!**

各学校の校内授業研究会の日程

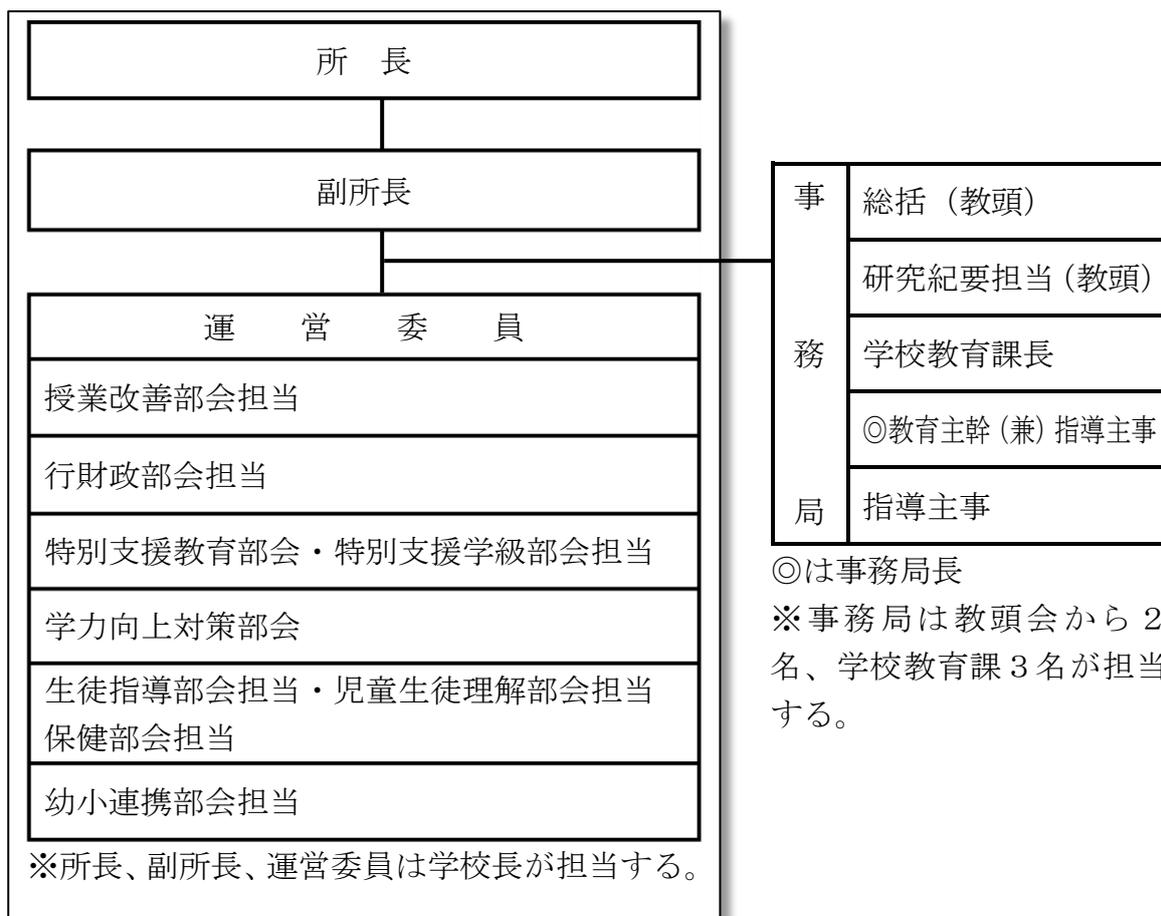
昨年度は、各校の授業研究会に、小中だけではなく高校からも参加者があり、学びを深めることができました。今年度も、たくさんの学びを共有しましょう。



	自ら学びをつくる子どもの育成（４年次） ～子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して～			
	7月10日（木）		道徳（1年），社会（4年）	
	9月10日（水）		体育（3年），社会（5年）	
	11月 6日（木）		図工（2年），家庭科（6年）	
	自ら学び続ける子どもの育成（6年次）			
	7月 2日（水）	算数（5年）	10月15日（水）	算数（2年）
	7月16日（水）	算数（6年）	11月26日（水）	社会（4年）
	9月10日（水）	国語（1年）	12月10日（水）	総合（3年）
	仲間と関わりながら、学び方を身に付ける子どもを育てる ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化な充実を目指して～			
	7月7日（月） 計画指導訪問	1年（生活、音楽） 2年（国語、算数、図工） 3年（理科、音楽） ぐんぐん、太陽（生活単元、自立活動）		4年（道徳、算数、学活） 5年（総合、家庭科） 6年（道徳、算数、社会、体育、外国語）
	10月28日（金）	研修会「今、子どもたちにつけたい力～学力向上をふまえて～」講師：小林宏己氏		
	深い学びの実現を目指して～単元デザインを核とした授業づくり～			
	6月25日（水）	国語（4年）	10月20日（月）	国語（6年）
	7月10日（木）	算数（3年）	10月29日（水）	わかば
	9月 3日（水）	算数（5年）	11月11日（火）	算数（1年）
	10月 3日（金）	ふたば1，2組	12月 3日（水）	算数（2年）
	一人ひとりが自分らしく育つ授業づくり			
	6月17日（火）	道徳（5・6年）	11月18日（火）	国語または算数（2年）
	10月 7日（火）	音楽（3・4年）	12月 1日（月）	国語（1年）
	10月21日（火）	自立（特別支援）		
	「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成 ～一人一人がしっかり考え、みんなで学びをつないでいこう～			
	7月14日（月）	きらきら学級	11月20日（木）	算数（5年）
	7月17日（木）	算数（6年）	12月10日（水）	生活（1年）
	9月10日（水）	算数（3・4年）		
	生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成 ～表現力を高める言語活動の工夫～			
	6月 9日（月）	校内実践交流会		
	9月11日（木）	美術（2年） 英語（1年）		
	11月12日（水）	町委嘱公開授業研究会 音楽（1年） 社会（3年） 道徳（2年）		

- ・授業研の日程や内容の詳細については、後日各校から案内があります。
- ・町内の小学校だけでなく、幼児施設や谷地高校にも案内を出します。
- ・各学校の校章です。由来や学校の概要について、R7かほくの教育【概要版】をご覧ください。

河北町教育研究所 令和7年度組織運営機構図



研 究 部	授業改善部会	33名所属
	児童生徒理解部会	36名所属
	特別支援教育部会	39名所属
	教育行財政部会	8名所属

専 門 部	学力向上対策部会	8名所属
	生徒指導部会	8名所属
	特別支援学級部会	14名所属
	保健部会	7名所属
	幼小連携部会	8名所属

- ※ 研究部、専門部の部会長は、教頭が担当し教頭が所属する学校に事務局を置く。ただし、教育行財政部会、特別支援学級部会、保健部会は所属部委員から部会長を選出する。
- ※ 所員は、研究部のいずれかに所属し、専門部員は、各学校の代表者で構成する。

研究部会

授 業 改 善 部 会

I テーマ 道徳科の目標や授業づくりのポイント

本部会は前年度、村山教育事務所より指導主事を招き、特別活動についての研修を行った。授業改善を進めていくには、まずは話し合う力を子どもたちに身につけさせる必要があるという考えからである。同様の流れから、今年度は考え、議論する道徳の授業づくりについて学びを深めていきたいと考えた。

II 活動の内容

1 第1回研究部会

- (1) 日 時 令和7年7月31日(木) 9:00～10:50
- (2) 場 所 河北町立谷地中部小学校 5年1組教室
- (3) 内 容

講話・演習

『『考え、議論する道徳』の授業づくり』

講師 寒河江市教育委員会 学校教育課

指導推進室長補佐(兼)指導主事 古澤 純子 氏

① ミニ講話「考え、議論する道徳」とは

【参加者の感想より】

- ・文科省が出している参考映像などを紹介していただき、良い学びになりました。指導案事例のサイトや、日々の指導や授業研の参考になるサイト等を教えていただけるのは大変ありがたいです。

② 自己を見つめ、多様な考えを話し合うために

○活用しやすいツールなどの例示

心情円 ワークシート ICTの積極活用

○谷地南部小学校 4学年

「このままにしていたらー規則の尊重」ダイジェスト動画の視聴

- ・担任の自己開示により、本音で話し合う子どもたちの姿
- ・発言を保障される学級風土の醸成

【参加者の感想より】

- ・道徳的諸価値を理解させるために、私自身が自己開示していかなければと感じました。私自身の経験や失敗なども話して、子どもたちと本音で対話していける授業、クラスの雰囲気づくりをしていきたいと思えます。

- ・授業の様子を動画で見せていただいたことで、教師の声かけ、板書の仕方、子どもとのかかわり方など大変参考になりました。

③ 2学期に行う道徳の授業づくり

- 2学期以降に実施する授業づくり
 - ・参加者を担当学年ごとにグルーピングし行う。
 - ・事前に選んだ教材を持ち寄り、話し合いを進める。

【参加者の感想より】

- ・演習では、他校の先生と一緒に道徳の授業を作っていくということで、一人では考えつかなかった流れや視点に気づくことができました。一人で考えるよりも多くの先生と考える方が教材文についてもより深く理解し、多面的に捉えられると感じました。



④ 道徳の授業の「終末」について

- 「終末」部分についての考え方
- 終末時の読み聞かせで活用できる本の紹介

【参加者の感想より】

- ・授業のまとめは…ということで「絵本を読む」という1つの方法を教えていただき、ぜひこれから活用させていただきたいと思いました。
- ・道徳のまとめについて、折り合いをつけたり、1つにまとめたりしなくても良いということで、本当に多面的、多様な考えに触れることが大切なのだという事を感じました。

Ⅲ 成果と課題

- 道徳科の授業そのものの基本的な部分を再確認する機会となった。授業実践動画の視聴を行ったことで、授業づくりや声かけなどのポイントのイメージを共有することができ、大変有効だった。
- 道徳の授業づくりはこれまで後回しにしてしまいがちだったという声があった。今回グループ演習を行い、他校の先生方と活発な話し合いができたことで、授業づくりについて前向きになれたという感想が多かったことは大きな成果であった。
- ▲特別活動や道徳科の研修を重ねてきたが、目に見える学力向上につなげていくには時間がかかる。町の課題から見ると、国語や算数など主要教科の授業改善に直接つながるような内容の検討も必要である。

(谷地南部小学校 樋口 智一)

児童生徒理解部会

I テーマ「安全・安心な学びの場の構築 ～生徒指導実践上の4つの視点を生かして～」

近年、児童生徒を取り巻く環境は多様化・複雑化し、安心・安全な学びの場の構築が一層重要になっている。そこで、生徒指導提要で示される4つの視点を授業や学校生活に生かすことで、児童理解を深め、問題行動の未然防止や健全な成長につなげることをねらい、本テーマを設定した。

II 活動の内容

令和7年7月31日（木）9：00～10：50 谷地中部小学校

講話・演習 講師：村山教育事務所 指導課 指導主事 森岡裕香子 氏
指導主事 佐藤 章子 氏

1 **講話**

(1) 県内のいじめ・不登校等の現状

- ・いじめの認知件数は、前年度に比べ、小・中学校ともに減少となったが、依然として高い数値で推移している。この結果は、「いじめの定義」が学校に浸透し、小さいいじめも見逃さないように、積極的な認知を学校組織として進めた成果である。
- ・不登校児童生徒数は増加傾向にあり、生徒指導上の喫緊の課題となっている。要因は多岐にわたっているが、近年は特に、学業不振による不登校が低年齢化し、小学校で増加傾向が見られる。



(2) 『生徒指導提要』が示すこれからの生徒指導

- ・「生徒指導提要」は、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書
“学習指導要領は買うけれど、生徒指導提要は買わない”…危機感
- ・「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への観の転換
- ・プロアクティブな生徒指導の展開
“特定の児童生徒に焦点化した「事後」指導・援助”から
“全校体制で取り組む「日常的」支援に基づく生徒指導の展開”へ
- ・学校を魅力ある場所にするには・・・
あらゆる教育活動で「居場所と絆をつくる」
学習指導と生徒指導の一体化
授業に内在化した生徒指導

2 演習 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくり

小中学校の先生方の混合グループをつくり、ワークショップを行った。はじめに、いくつかの授業づくりの手立てや工夫を提示し、それが「生徒指導の実践上の4つの視点」のどれに該当するかを考えてみた。

その後、自身の日頃の実践を振り返り、児童生徒が様々な考えや意見を出し合い、対話的に学ぶための働きかけとして授業ではどのような手立てをとっているかを付箋紙に書き出し、「生徒指導の実践上の4つの視点」に分けながら、気づいたこと・感じたこと・これから意識したいことなどを話し合った。日頃とっている手立てがある視点に偏っていること、同じ手立てでも先生によって違う視点で行っていることなど、様々な気づきがあり、自分にはない見方や価値観を広げている場面が見られた。



3 振り返り（参加者の声）

○これまでの自分のかかわりを生徒指導の4つの視点をもとに振り返ることができ、自分のかかわりが「自己決定」に集中していたことを感じ、それと同時に課題も見つけることができました。2学期に生かしていきたいと思います。

○生徒指導について知っていたつもりになっていたことが多かったなど今日の研修を通して実感しました。普段の授業で生徒指導の4つの視点を意識しながら実践していくことが、いじめ防止につながっていくことを研修から理解することができ、有意義な時間になりました。

○現状について知るだけでなく、「生徒指導提要」が日々の生徒指導のヒントになると改めて感じるようになりました。未然防止のための「全ての生徒に対する指導」を、演習を通して考えることができました。



Ⅲ 成果と課題

生徒指導の役割は、時代とともに変わってきている。「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への転換である。現行生徒指導提要もそれに合わせてしっかりとアップデートされている。様々な多様化された生徒指導事案に寄り添った内容になっているので、ニーズに応じて手に取っていくことが必要である。

そして、目の前の子どもたちの実態に応じて、その時々で、どの視点を取り上げるのかを吟味しながら、普段の授業の中にこそ生徒指導の実践上の4つの視点を採り入れていくことが必要である。

（溝延小学校 佐藤 正孝）

特別支援教育部会

I テーマ

すべての子どもへの 切れ目ない支援のあり方について

II 活動の内容

- 1 日時 令和7年7月31日(木) 9:00~10:50
- 2 場所 河北町立谷地中部小学校 食堂
- 3 内容 講話「すべての子どものすこやかな成長のために」
講師 山辺町立相模小学校
教頭 武田 豊己 氏

(1) 発達障がいの概要と対応

○知的障がい

- ・知的機能に制約、適応行動に制約を伴う、発達期に生じる障がい。
- ・個人内のアンバランスは本人にとって大きな足かせとなっている。
- ・早寝早起き朝ごはん等、生活習慣の遵守。お手伝いは就労に向けた第一歩。

○ADHD

- ・不注意型、多動・衝動型、混合型。不注意型は気づかれにくい。
- ・しつけの三原則、メディアは控えめ、ペアレントトレーニングを。
- ・確かな学級経営を大切にし、そのうえで個別対応を。信頼と尊敬を取り戻す取組みを大切に。
- ・生活習慣の確立ができると薬物療法も大切となる。(本人の利益のための薬物療法である)
- ・併存しやすい病気として反抗挑戦性障がい。反抗が癖に。薬物は効かない。

○ASD (自閉スペクトラム症)

- ・社会性・コミュニケーション・イマジネーションの質的な差異。
- ・発達の質(順番) 障害が押されている。難しいことが分かっていても、より易しいことが分からない可能性がある。できることにムラがある。
- ・生活力の向上がカギであり、学力より生活力を重視し、お手伝いなどを繰り返し、根気強く取り組んでいく。

(2) 障がいに共通した支援に必要なこと

○言葉をけずること、一目でわかる工夫をすること

○小さな努力をほめること

- ・動き出したらすかさずほめる。しようとした瞬間にほめることで、チャンスを逃さない。(動き出しても最後までできるか分からないため)

(3) すこやかな成長のために

○ペアレントトレーニング

- ・子に応じたほめ方を探ることが必要。できているときにこそ強化する。
- ・悪い行動を禁止しても、正しい行動（「ちゃんと」）が分からない。

○ソーシャルスキルトレーニング

- ・社会でうまくやるためのコツの練習。「生活の場での汎化」がカギとなる。

○メディアとの付き合い方

- ・ゲーム依存症、SNS依存症他。
- ・他の楽しみの保証、望ましい行動を増やしていくこと。

(4) 情緒障がい児の進学・就労について

○小中学校卒業後の進路について就労までも含め具体例で紹介いただいた

○特別支援学級在籍の子どもたちに意識づけたいこと

- ・将来、社会でみんなと一緒にいるために、今は分かれて一人ひとりに必要な力をつけている。いつまでも友達と別ではない。

(5) 愛着不全児の支援について

○最近メディアの影響から、間接的に愛着不全になっているケースが増加。

○ASDはパターン化を教える。愛着不全は愛情を教える。

(6) 感想より

- ・年々変化している発達障がいの概要、支援について、多くの実践や経験をもとに貴重なお話をいただき感謝している。特別支援学級の子どもにどのように関わり、支援するとよいか悩む瞬間があり、日々の実践の参考にしていきたい。
- ・ASDやADHDの子どもはこんな風に困っていたのか、難しさを感じていたのかと考えながら話を聴くことができた。それぞれの特性に合わせた指導を改めて考えていきたい。ほめる内容についても、児童の様子や表情・行動をよく観察し、自己有用感が高まるように行っていきたい。学びの多い研修だった。
- ・支援学級・支援学校の子どもの進学・就労について、よくわかっていないことがあったが、興味深く聞くことができた。

Ⅲ 成果と課題

○個別な支援を必要とする子どもの特性や見取り、支援のあり方について、豊富な経験から演習も取り入れながら講義いただき、有意義な時間となった。

○学校で、家庭で、親子で等、場面や役割に応じた支援について、演習を通して具体的に考えることができた。

○特別支援学級・学校卒業後の進路についての話も聞くことができ、将来的な就労をも見越した支援について考える良い時間となった。

▲通常学級で特別な支援を必要とする子どもも増えている。特別支援教育への理解を深めるとともに、諸機関との連携をさらに強化し支援のあり方を検討し続けたい。

(谷地中部小学校 飛塚 健史)

教育行財政部会

I テーマ 「信頼に応える学校事務をめざして」

II 活動の内容

1 第1回研究部会

(1)日時 7月31日(木) 9:00～11:30

(2)場所 河北町立谷地中部小学校 第二家庭科室

(3)内容

①講話：「地域学校協働本部事業と地域人材について」

講師：河北町教育委員会 地域コーディネーター 宮地 裕子 氏

ア. 地域学校協働本部主体事業

○学校支援活動

- ・地域コーディネーターによる学校、学校支援ボランティア間の連絡調整
- ・学校支援ボランティアによる活動の実施

(各学校継続および新規)

- ・地域学校協働本部会議開催

イ. その他の地域協働活動

○放課後子ども教室

- ・地域の協力のもと、子どもたちが安心して活動できる居場所を開設ダンス、けん玉、昔の遊び、アスレチック、アクセサリ作りなど
- ・放課後子ども総合プラン運営委員会開催

○家庭教育支援

- ・親子の体験的な活動や家庭教育に関する学習機会の提供に対する支援
- ・「幼児共有ふれあい広場」「やまがた子育て講座」の開催支援

○今後について

- ・学校支援者保証制度に加入し、万が一の事故やけがに備えている
小学校・中学校それぞれ加入しているが、統合時には加入のタイプを大人数のものにしたい。
- ・他の自治体の地域学校協働活動サポート人材バンクについての取組みを参考にできないか検討している。



- ・今年度から変更になった地域学校協働本部事業に係る消耗品の購入については、生涯学習課の地域コーディネーターと連携し配当内で要望し、現物支給となった。

②大型備品（管理備品、教育活動備品）現有数の確認

教育行財政部会では「大型備品現有数一覧表」を作成し、毎年新たに購入した備品等の現有数確認を行っている。大型備品は学校間で貸し借りができる体制となっており、学校教育活動に非常に役立っている。さらに必要とされる大型備品の要望については、校長会と連携しながら町に継続要望して各学校の教育環境整備に努めていきたい。

③事例研修、情報交換

退職後の給付金制度や給与・旅費について、また事務連携会議とも共催し、他市町の学校集金等についても資料を持ち寄り研修した。

Ⅲ 成果と課題

- 地域学校協働活動については、今後、小学校統合が近づく中で、地域とつながる場の設定や、学校が地域や家庭と一体となり子どもたちを育てていくことに継続して取り組むことができるよう、地域人材の把握や継続した支援の確保、そしてより一層コーディネーターとの連携が必要になることがわかった。
- 学校で児童生徒が安全に生活し、教育活動が円滑に行われるためには、財務管理を通して、学校経営に参画する事務職員の役割も大きくなっている。そこで本年度は、快適に学習できる環境を整備し、教育財産を適正かつ有効に活用できるよう研究を進め、信頼に応える学校事務を目指し、部員一人ひとりの資質と力量を高めることができた。
- 事務連携会議と共催し、一人一研究を行って発表した。事例研修や情報交換は、貴重な自己研鑽の場となっている。事例の共有や課題解決に向けての話し合いを積極的に行ったことで、新しい視点の発見や見逃しがちな小さな疑問の解消につながった。
- ▲昨年度、「町学校予算の手引き」の更新を行ったが、消耗品の購入方法や補助金の交付規定など今年度も変更があった。変更があった時には、各校でその都度修正しておき、その後に部会で共通理解を図り更新していく必要がある。

(河北中 岩淵満里子)

専門部会

学力向上対策部会

I 運営方針

河北町内の全児童生徒の学力をより一層向上させるため、課題意識を共有し、情報交換を行いながら授業改善に取り組む。特に今年度は、児童生徒に必要な資質・能力を検討し、各校の実態に応じた実践を行い、成果や課題を交流する。

II 活動の内容

1 第1回学力向上対策部会議

6月20日（金）西里小学校

- (1) 部会組織、運営方針、事業計画の確認
- (2) 河北町の児童生徒に育成したい資質・能力について話し合い焦点化する。

【河北町の子どもたちに必要な資質・能力は何か】

- ・情報を正確に読み取る力。表現力（説明）。思考の言語化。
- ・読むこと。書くこと。説明すること。自分の言葉で表現すること。
- ・児童同士の関わりの中で良さを認め合いながら授業をすすめる力。
- ・学んだことを実際の生活の中で生かすこと。
- ・考えを、図や式で説明する力。
- ・主体的に授業に参加し、授業を進めていく力。
- ・個々の能力差が大きい。学力の底上げを図る必要がある。

【言語活動を重視した今後の取組み】

どの学校の実態からも、特に「言語能力の育成」が課題として挙げられた。小学校学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力として、筆頭に「言語能力」が掲げられている。言葉は学習活動を支えるうえで重要な役割を果たすものであり、すべての教科における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。

各教科等において、知識や技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育むために言葉を使って「考える」、「伝え合う」、「まとめる」といった活動を計画的かつ意図的に行っていく。

思考の基盤となる言語能力を高めるため、各教科において単なる「読む」や「書く」だけでなく、「話す」「聞く」などを組み合わせた、より実践的な言語活動を重視した授業づくりに取り組んでいく。

2 第2回学力向上対策部会議

11月19日（水）西里小学校

(1) 全国学力・学習状況調査からみる河北町の現状と課題

①河北町教育委員会（鈴木玄輝指導主事より）

(2) 各校の学力向上の取組み

①各校での学力向上に関わる取組みの成果・課題（アクションプランをもとに）

②成果・課題を受け、今後さらに取り組んでいきたいこと

【各校の取組みから】

- ・教科担任マイスターを活用し、つけたい資質・能力と学習活動や学習課題を示した単元計画（学びのプラン）を児童と一緒に作成、確認し、授業に取り組んでいる。
- ・授業の中で、様々な考えを出し合い、お互いに学び合っていくことができるような指導を充実する。
- ・振り返りの充実を図り、子どもたちで学びをつくっていく。
毎時間の振り返り、1日の学習の振り返り。
- ・授業改善の取組み。異学年担任間で授業を仕組み、日々の授業を通し、授業力の向上を図る。
- ・朝読書の継続。放課後図書館の開放。
- ・個人総合、自由進度学習の推進。
- ・算数のスキル学習（縦割り班での教え合い、担外の先生の協力）
- ・表現力を高める言語活動の工夫を校内研究の視点にし、教師の問い返しにより学びを深めていく。

Ⅲ 成果と課題

○第1回目の部会で、「河北町の子どもたちに必要な資質・能力は何か」というテーマでの対話を行った。どの学校でも求められているのは「言語活動」の充実であり、それを通して思考力、判断力、表現力を育成することである。各校で言語活動の充実に向けた取組みの重要性を改めて確認できた。

○各校で、学力向上のための対策を学校全体で取り組んでいる。

授業改善に向けた具体的な取組みや朝の時間や放課後の時間を活用した児童の主体的な学習への取組み等、他校の取組みの成果から学ぶことが多かった。

▲各教科等の特質に応じた言語能力を育成するために適した活動であるか、また、言語活動を通して子どもたちがしっかり考えることができているかが重要である
今後、河北町の学校全体における組織的な取組みとして、言語活動を効果的に取り入れた授業づくりを進めていくことが大切になってくる。

（西里小学校 川越 雅彦）

<西里小学校>

1 学力調査等の分析と課題

○学力調査から見られる本校の課題

①国語

- ・目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討すること。
- ・目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
- ・目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること。

②算数

- ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。
- ・図形の面積や知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述すること。
- ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。

2 学校で育成したい資質・能力

◎自分の考えや伝えたいことを、図や表、数や式、言葉を用いて整理しながら表現すること

- ・情報を正確に読み取り、自分の考えを伝えるために活用する力
- ・自分の考えや意見を的確に伝え、仲間と協働して課題に取り組む力
- ・目標達成に向け、協議し、粘り強く取り組む態度

3 資質・能力を身につけるための主な指導・取組み（授業改善）

- ・学習の課題を明確にし、子どもたちが主体的に学び合いながら解決していく授業を行う。
- ・交流できる場の設定・工夫をするなどして、対話が自然に生まれる学び方を工夫する。
- ・伝えたいことを適切な言葉や文章でまとめる機会を意図的に設け、全ての教科における学習の基盤となる言語能力を継続的に育成していく。
- ・国語の学習において、文章の要約や心情、人物像を読み取ること、必要な情報を見つけることなどを大事に扱っていく。
- ・算数では、ミニテストなどで自分のつまづきを把握できるようにし、これまで以上に基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。
- ・各教科でICT機器を効果的に活用した学習を推進する。
- ・子ども理解を大事にした、温かな学級づくりを行う。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学級づくりを大切にすることで、各学級に安心・安全な風土が育っている。
- ・朝のスピーチなどの活動を通して、自分の考えを理由もあわせて表現することや興味をもったニュースなどの情報を自ら収集し、相手に伝えることができるようになってきた。
- ・単元を貫く課題の設定や問いを起点とした学習計画、単元構成などを意識して授業改善を重ねていく。
- ・タブレット端末を、自分の考えを交流するためのツールとして活用することができるようになってきている。
- ・考えを記述して説明することに対し、各教科で押さえるべき用語を確実に習得させたり、読む経験・書く経験を意図的・継続的に積み重ねたりしていく必要がある。

〈溝延小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（NRTと全国学力調査から）

- ・NRTの偏差値が、国、算、理の全教科で過去4年間において下降している。しかし、それぞれの学年で偏差値が向上している教科もある。
- ・出された課題に対しては意欲的に取り組むが、より発展的な学習や創意工夫して表現する力が弱い。さらに、学力や家庭学習の内容にも個人差がある。

【国語】

- ・文章を聞き取る力、読み取る力、要旨を把握する力、丁寧な言葉で話す力。
- ・考えや感想を伝え合う力や話し合う力。
- ・目的や意図に応じて伝える内容を考える力。図表を用いて考えを伝える力。

【算数】

- ・数直線上の数、計算、小数、分数、図形。
- ・表、グラフ、□を用いた式、百分率、速さ。
- ・限られた時間内で文章題を読み取る力。

【理科】

- ・電気、結論の理由の表現力。

2 学校で育成したい資質・能力

- ・主体性………より発展的な学習に取り組んだり、創意工夫して表現したりする力が弱く、語彙や表現力が乏しいため。
- ・つながる力………地域、人、モノとのつながりが少なく、学びが学級・学校で閉じてしまうため。

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・学校研究の中で、児童と単元計画を立て掲示し、主体的な学びを育むよう試行する。
- ・本年度途中より、放課後に家庭学習のために図書室を開放し、学習に集中したり、友だちと教え合ったりすることにより、学力アップを図った。
- ・学校と家庭で連携し、家庭学習について意識する週間「なでしこ週間」を年5回設け、保護者のサポートのもと家庭学習に取り組んでいる。
- ・毎週木曜日の朝活動を、「学力向上朝学習」とし、学力向上の意識をもってアシストシートやNRT及び過去の全国学調の問題などに取り組んでいる。
- ・NRTの結果を各学年担任が考察し、日頃からつけたい力や資質・能力を意識した指導を行い、授業改善に取り組んでいる。
- ・タブレットを活用し、音読の向上を図ったり、個々人の処理速度に応じて練習問題に取り組むことができるようにしたりして、個別最適な学びになるようにしている。
- ・有機野菜を育て、給食センターや動物園に寄贈した。その際、説明のパンフレット等も添えて直接手渡すなど、校外に発信し地域等とのつながりをもつようにした。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学習の中で、しっかり意見や考えを出せるように成長している学級が多い。
- ・音読を大切に指導したことで、粘り強く問題文を読む児童が増えつつある。
- ・放課後、図書室で学習している児童が集中してできており、学び合いの様子も見られる。分かるようになりたいという学びに対する主体性が児童に芽生えてきている。

〈谷地中部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（全国学力調査から捉えた本校の課題）

- ・全教科を通じて、文章や問題文を読み抜く力、読み取る力、資料の取捨選択をする力をつけなければならない。

【国語】

- ・目的や意図に応じて、必要な情報を集め、伝え合う内容を検討すること
- ・書く内容を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること

【算数】

- ・基礎的基本的な知識・技能の定着
- ・答えを求めるまでの解き方を式と言葉を用いて記述すること

【理科】

- ・条件をどのようにすれば良いかの検討
- ・2つの実験について、差異点や共通点から新たな問題を生み出し表現すること

2 学校で育成したい資質・能力

- ・前に踏み出す力（主体性）
- ・チーム力（協働・対話）
- ・考え抜く力（解決・創造）

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・学校研究における授業改善の視点を生かして、日々の授業を行う。
- ・カリ・マネ表やアクションプランを作成・共有・活用することを通して、日頃からつきたい力を意識した指導を行い、授業を改善していく。
- ・基礎学力の充実を図るとともに、子どもたちが主体的で協働的に学ぶ探究型学習の授業改善に力を入れる。
- ・国語では、単元を貫く言語活動を通して、目的意識や相手意識、読むことへの必要感を持たせた授業を仕組む。
- ・算数では、単元をつなぐ授業研究を試行し、授業力向上と学力定着を結びつける。
- ・総合的な学習の時間では個人総合を年間 15～20 時間設定し、自分で課題を見つけ追究する過程を大切にする。
- ・ICTを活用し、意欲の向上、教材や意見の可視化、個別の探究活動を進めていく。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学びに向かう姿勢が整い、落ち着いた環境の中で学習に取り組んでいる。
- ・単元計画を児童と共に作ると同時に、何を学ぶのか、何のためにこの活動をするのか、どんな力をつけるのかについて確認し、取り組むことで、課題を自分事として受け止め、学びを深める姿が見られるようになった。
- ・協働的に学ぶ活動や話し合い活動を通じて、自分の考えを持つこと、友達の考えを聞くこと、自分の考えを伝えることに慣れ、考えを広げたり深めたりする経験を積み重ねている。
- ・個人総合を通して、自分の課題に没頭して挑戦する姿が多く見られるようになり、他の教科の学習にも意欲を持って取り組むことができるようになった子どもが増えた。

〈谷地南部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（全国学調・NRT 結果からみた本校の課題）

【国語】

- ・目的に応じて自分の考えや感想をまとめ伝える
- ・相手や目的に応じて工夫して書く
- ・目的に応じて情報を選び、構成を工夫して書く

【理科】

- ・問題に対して、解決のための観察・実験の検証
- ・実験器具を適切に操作する技能

【算数】

- ・整数と小数のしくみ、小数のかけ算・わり算
- ・単位量当たりの比較
- ・百分率・割引きの式や値段
- ・基本図形の意味・性質の理解

2 学校で育成したい資質・能力

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| (1) 一読して内容の概要をつかむ読解力 | (3) 複数の資料から情報を読み取る力 |
| (2) 目的や相手に合わせて自分の考えを伝える力 | (4) 3つのきく力「聞く・聴く・訊く」 |

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・週2回、朝読書の時間を設定し、並行読書やブックトーク・読み聞かせ等を取り入れながら読書に親しめるようにする。
- ・言葉の精選：語彙を増やす。読む・書く・話す場面で、どの言葉を使うのがふさわしいか、児童に問い返すなどして考える場を作る。
- ・学習や活動の目的と見通しを児童と共有し、情報の整理の仕方や交流の方法など、必要に応じて具体的な指導を積み重ねていく。
- ・目指す言語活動例や交流の仕方などのモデルを示し、適切な指導と評価を繰り返していく。
- ・学年の系統性を意識し、既習の学びを確かめながら学習を進める。
- ・ネームカードを意思表示の手立てとして積極的に活用する。
- ・学んだことを、他教科や委員会等の別の場面で生かせるように、活動場面や考える場面を設定する。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・教育課程を一部変更し、週2回採り入れた朝読書では、読書習慣が少しずつ身につけ始めているほか、学習に関わる並行読書や読み聞かせなどを積極的に採り入れた効果が表れ始めている。今後も、児童の選書の力が高まっているか、質の高い読書につながっているかを確かめながら、朝読書を継続していく。
- ・単元のまとめでどのような力がつけばよいかを明確にするために、指導者が言語活動に実際に取り組んだり、指導のポイントとなる箇所について動画で児童と共有したりするなど取り組んできた。特に低学年で、モデルを通してねらいに沿った交流や発表のよさを実感しており、系統的に学びが積み上がるように今後も目指す姿を統一していく。
- ・児童の実態を見取る精度を上げ、単元末の児童の姿を具体的に想像し、そのために必要になる指導を一つ一つ行うことをどの授業でも繰り返していく。

＜谷地西部小学校＞

1 全国学力・学習状況調査の分析と課題（本校のよさ○と課題△）

【国語】○書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる。

△学年別配当漢字を文の中で正しく使うことができていない。

△時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えられていない。

【算数】○棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる。

△簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができていない。

△小数や分数の加法について、共通する単位を捉え計算できていない。

【理科】○電気の回路の作り方について、実験の方法を発想し、表現することができる。

○水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができる。

△アルミニウム、鉄、銅について、「電気を通すか」、「磁石に引き付けられるか」等の知識が身につけていない。

△レタスの種子の発芽の結果から、新たな問題を見出し、表現できていない。

【質問紙】○自分にはよいところがあると思う。

○将来の夢や目標をもっている。

○地域や社会をよくするために何かしてみたいと思っている。

○友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気づいたりすることができている。

△読書や新聞を読む時間が少ない。

△国語と理科に比べて、算数の勉強が好きではない割合が高い。

△算数のわけや求め方を書く問題の解答について、全く解答しなかった割合が高い。

2 学校で育成したい資質・能力

◇やってみよう【挑戦・自律】

◇かかわろう【協働・尊重】

◇感じよう・考えよう【創造・探究】

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

・全校生で算数のスキル学習に取り組み、基礎基本の定着を図る。

・学習の発表の場を設定する。学習して身につけたことを全校生の前で発表し、表現力を育むとともに、関わり合いながら学習することを積極的に行う。

・授業改善の視点を持ち、各学級で課題解決に向けた授業の展開の仕方を工夫する。

・個人の総合的な学習の時間に、担任以外も関わって研究を進める。

・筋道を立てて説明したり書いたりする力をつけるために、交流して考えたことや感じたことを書くようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

・月に1～2回、「全校算数」の時間を設定し、多目的ホールで縦割り班ごとに学習したところ、意欲的に算数の学習に取り組む姿が見られた。基本的なドリルやプリントだけでなく、学年によっては、発展的な問題を用意し、各自が選んで復習できるような環境を準備した。上学年が下学年に教えたり担外の先生方から支援していただいたりして習熟の時間をもつことができた。

・学習して身につけたことを、学級や学年ごとに全校生の前で発表した。説明の順序や言葉を考えて、工夫して発表する姿が見られた。

・総合的な学習の時間に、個人で研究する「はかせちゃんタイム」に取り組んだ。子ども達3～4人のグループを教師が担当し研究を進めた。グループ内で考えたり相談したりして、昨年度よりも内容の濃い研究になった。

＜北谷地小学校＞

1 学力検査等の分析と課題（全国学調・NRTから見えてきた課題）

①国語

- ・複数の情報から内容を要約し、条件に従って文章の構成を考えながら自分の言葉で書く力
- ・叙述を基に文章全体の構成を捉えて要旨を把握する力

②算数

- ・基礎基本をしっかりと定着させ、問題解決に向けて筋道を立てて考え、それを分かりやすく表現する力（記述・言葉）

2 学校で育成したい資質・能力

- ・目的に応じて文章の構成を考えながら文章を書く力
- ・文章全体の構成を捉えて要旨を捉える力
- ・一人ひとりがしっかり考え、みんなで学びをつなぐ力（研究テーマ）
- ・児童が主体となり、協働的に深く学び合う力（複式学級を意識した授業づくり）

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・あらゆる機会を捉え、言語活動能力の育成に努める。
- ・全校一斉読書の時間（毎週月曜日と金曜日を朝の時間）を確保し、感性豊かな児童の育成に努めるとともに、言語活動能力の向上を図る。
- ・意図的に文章を書く活動を多く採り入れていく。（文章の構成を意識して）
- ・みんなで学び合いをつないでいけるような振り返りを毎時間行い、それを次時に活かせるようにする。
- ・単元のゴールを明確にし、児童とともに確認した上で授業を進めていく。
- ・ICTの積極的な有効活用に努める。
- ・誤答の理由についてもじっくりと考えさせ、言葉や式を使って相手に分かりやすく説明することができるようにする。（書く・発表など）
- ・どこからそう思ったり考えたりしたのかを叙述をもとに考えさせる。
- ・話し手の目的や意図、聞き手の求めていることに応じて、話す際の材料を集め、分類したり関連づけたりして、伝え合う内容を考えることができるようにする。
- ・式や言葉を使ったり、具体物や半具体物を操作したりしながら、相手に分かりやすい説明ができるようにする。（書く・発表など）
- ・四則演算では、速く正確に計算ができるようにするだけでなく、計算の意味と関連づけながら計算ができるようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・国語の読み取りの学習では、低学年はいろいろな学習形態（クイズ・紙芝居・創作劇など）を仕組んだことで、内容を捉えることができた。中学年から高学年にかけては、文章の中の言葉を根拠として話し合ったり、書き記したりすることができるようになってきている。
- ・国語の書く活動では、低学年は事実を書くことはできたが、自分の思いや考えを書くことが難しい場面もあった。高学年では、作文指導において字数を提示して書かせることに取り組んだので、条件に合わせて長く書くことができるようになってきている。
- ・算数では、中学年は図や式で書き表すだけでなく、言葉で説明ができるようになってきている。しかし、算数用語を使いながら分かりやすく書き表すところまではいっていない。高学年は、自分の考えを説明することができるようになってきているが、四則計算が速く正確にできなかつたり、単元によっては、図が表している意味の理解ができなかつたりする児童もいる。

〈河北中学校〉

1 全国学力調査等の分析と課題

- ・自らの課題を明確にして改善すること
- ・知識・技能を生かして文字で書き表したり、自らの考えや感想をまとめ伝え合ったりすること
- ・「授業時間以外での学習時間の確保」など、学習習慣を形成すること

2 学校で育成したい資質・能力

- ア 自ら判断して行動するための「思考力・判断力・表現力」
 - ・習得した知識・技能を活用して課題を解決するための力
- イ 自らを見つめ、向上させるための「自己調整力・レジリエンス」
 - ・自分の感情や行動をコントロールする力。困難を乗り越える力
 - ・自分の学びを客観的に振り返って価値づけたり、課題を改善したりする力
- ウ 互いを尊重し、高め合うための「コミュニケーション力」
 - ・人の気持ちや感情、場の雰囲気にくみ取り、意思疎通ができる力
- エ 意欲的・主体的に学び活動するための「自己肯定感」「他者理解」
 - ・ありのままの自分を肯定する、プラスに受け止めることができる感覚

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ア グループ学習の机間指導の際、問いを投げかけ理由や根拠を具体的に言語化させる。
- イウエ エンカウンターなどを通して、他者との良好な関係作り(問いを投げかけて考えを引き出したり、考えを肯定的に受容したりする態度)の素地を養う。
- イエ 創作した詩や短歌を鑑賞する際に作者(生徒)へ質問する時間を取り、考えを深めたり、思いを受け止めたりさせる。
- ア 出た答えに対して問いを投げかけ、根拠や理由を言語化して明確にさせる。
- イウ 課題に対する予想や自分の考えをまとめさせ、グループ活動の中で、生徒同士で議論(問い返し)を行い、改めて自分の考えにフィードバックさせる。
- ア 実験の計画を立てる場面で問いを投げかけ、既存の知識と結びつけながら必要な情報を整理させる。
- ウ スモールトークなど英会話の活動の中で、相手の発言を聞く態度を確認し、相手が話したくなるようなリアクションを生徒同士で行う。

4 取組みの振り返りと生徒の変容

- 問い返しにより、「考え・答え」に至った根拠を説明しようとする姿が見られた。
- 発問と発問をつなぐ手立てとして問い返しを実践し、思考の流れを整理・調整する上で役に立った。
- △ 問い返す場面、バリエーション、タイミングを想定しておかないと効果的な問い返しが難しい。

生徒指導部会

I テーマ

不登校未然防止のための情報共有と支援の在り方

II 活動の内容

1 第1回生徒指導部会（情報交換）

(1) 日時 令和7年7月9日（水）15：30～16：40

(2) 場所 河北町立北谷地小学校

(3) 内容

①「いじめ」I期調査認知件数と「不登校」対応数について情報交換

令和7年度町内の児童・生徒数は1117名（令和7年4月1日現在）である。当日の情報交換で確認したいじめI期調査の認知件数は、全体で237件であった。全児童・生徒数に対して約21%である。令和6年度の同会での報告では約20%という結果であり、前年度とほぼ変わらない認知件数と言える。不登校対応数としては、今年度は16件の報告があり、前年度15件に対して1名増という状況であった。

②いじめ・不登校の傾向と分析

- ・いじめに関しては、悪口やからかい、冷やかしなどが多い傾向にあった。コミュニケーション力が低かったり感情をコントロールできなかったりすることでトラブルになるケースが多々見られる。中学校ではSNSで知らない間にトラブルになっているケースも報告された。
- ・不登校に関しては、全く学校に来ていない児童・生徒も見られるが、適応指導教室「ゆうゆう」を利用したり、別室登校を行ったりして、繋がりを無くさない支援が行われている。渡部教育相談員や西塚スクールカウンセラー等の支援も非常に有効であると話題に上がった。

③その他話題に上がったこと

- ・一部の小学校では、お金を持って学区外に遊びに行く様子が見られ、各校の「くらしのきまり」等について情報共有を行った。統合を見据えて、「くらしのきまり」についても見直していかなければならないことを確認した。

2 第2回生徒指導部会（情報交換と講話）

(1) 日時 令和7年12月2日（火）15：00～16：40

(2) 場所 河北町立北谷地小学校

(3) 内容

①各校の「いじめ」Ⅱ期調査の状況と「不登校」への対応

- ・いじめⅡ期調査が全ての学校で終わっていたが、集計の途中あるいは子どもとの面談の途中等で、数字上のデータは得られなかった。
- ・いじめアンケートから大きな課題となるケースは見られなかったものの、小学校では低学年が多いことや、中学校ではSNSを使ったケースが多いことなどが話題に上がった。

②講話「アセスメントとチーム学校による不登校児童生徒等の支援」

講師 山形県教育センター教育相談課 指導主事 齋藤 昌枝 氏

- ・教育課題が複雑化してきている今日、不登校児童生徒への支援は、「社会的に自立することを目指す」必要があり、要因やその子どもに合った支援を探るためのアセスメント（見立て）をチームで行うことが大切であることを教えていただいた。
- ・チームにおけるアセスメントは、「井戸端ケース会議」のごとく、初動をできるだけ早く、パッと集まれるようにしておく。気になる児童生徒がいたら、K（気になる場所）B（生物学的要因）P（心理学的要因）S（社会学的要因）A（アセスメント・課題の本質）P（プランニング）についてケース会議を行う。特に、本人の強みや興味・関心に沿って支援計画し、大人の主観や主導で行ったり、すぐにレベルを上げたりしないことがポイントとのこと。事例に基づいて、実際にアセスメントを参加者で行って見たところである。
- ・いじめから不登校になったケースや不登校の背景に虐待が隠れているケース、発達障がいから生じる二次的な問題に起因する不登校のケースなどは、待ったなしで初期対応をできるだけ早く行うことが大切であると指導いただいた。



Ⅲ 成果と課題（○成果、▲課題）

○各校のいじめ・不登校の状況を共有し、様々なケースについて意見を交流できたことが良かった。また、齋藤指導主事の講話を基に、参加者が各校の生徒指導の中心となって、諸問題に対応していくことを確認したところである。

▲5年後の町内小学校の統合を見据えて、「くらしのきまり」や生徒指導上必要なことについてさらに情報を共有し、見通しをもって計画していかなければならない。
(北谷地小学校 真木 隆旗)

特別支援学級部会

I テーマ

「児童生徒の社会的自立に向けた特別支援教育の在り方」

II 活動の内容

1 特別支援学級部会研修会

(1) 日時 6月24日(火) 15:00~16:30

場所 河北町役場301会議室

(2) 講話 『みんなで喜び、みんなが育つ』

～社会につながる子どもの成長を支えるために～

講師 河北町立西里小学校 校長 齋藤 恒治 氏



(3) 講話内容

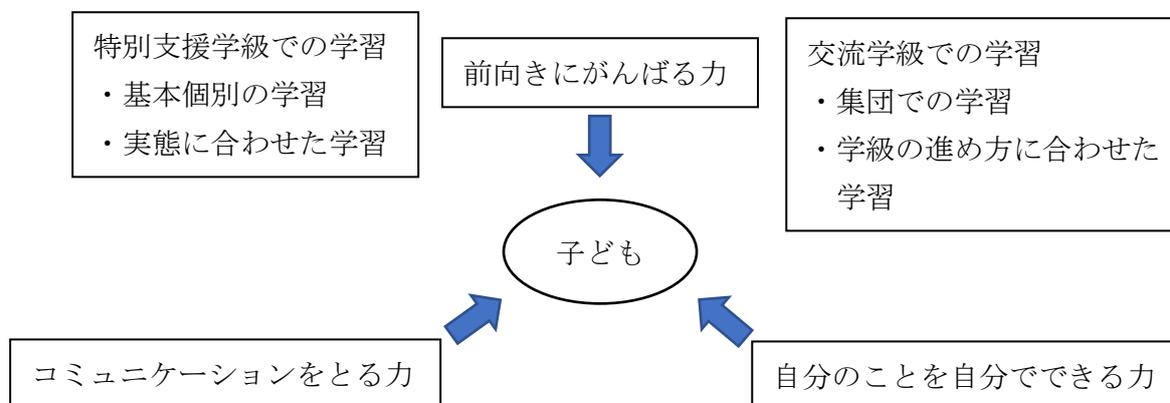
① はじめに

- 特別支援学級 → 目の前の子どもをどのようにしたいか。
 - ・親がいなくなった時に、この子はどうしていくのか…
- さまざまなことをやっても必ず成功する訳ではない。
 - ・子どもとの対話を通じて考える。

○「1」の原則、「99」の例外

② 特別支援学級がもつねらいと方向性

- その子どもは特別支援学級で、何のために学ぶのか。
 - 「自立した社会人として生きていくために…」



- ・ 日常の授業で、どのように育てるか。
→ 学習で意識した活動や取組みをしていく。
- ・ 教師はどのように子どもを見取っていくか。
- ・ 課題と考えられるところをよさとしてとらえること。
- ・ リフレーミング → いろいろな角度から子どもを見取っていく。

③ 演習Ⅰ「保護者からの相談」

- ・ 一方向の価値観だけで判断してはいけない。いろいろな見方で、子どもを見ていくことが必要。
- ・ 推測や思い込みで「汲み取った」つもりにならず、子どもの思いや考えを、じっくりと聞き取ることが大切。
- ・ 保護者に対して、一方的に考えを伝えるだけでなく、同じベクトルの中でお互いが理解し合えるようにしていくことが大切。

④ 社会的な自立を目指して（将来を見据えて）

- ・ 教育相談→今後どのような力をつけていくのか。ポジティブに話し合っていくこと。失敗体験ではなく成功体験を。

- ・ その子の「強み」はどんなことか
- ・ 大人になったとき、どんな姿であってほしいか。

→ 天才的な能力を引き出していくことが大切。

⑤ 演習Ⅱ「保護者・子どもとの合意形成を図ること」

- ・ 保護者の思いを十分に汲み取った上で、本当の意味でその子どものためになることはどんなことなのかを考える。
- ・ 保護者との合意をどのように形成するか。ビジョンを持った話し合いを行う。
→ なぜ特別支援学級に在籍することにこだわったのか。
- ・ 将来の社会人としての姿をイメージし、寄り添う姿勢で話し合う。

⑥ 大切にしていきたいこと

- ・ 子どものよさ（強み）を見つける（引き出す）援助を行う。
- ・ 子ども、保護者と同じベクトルになるような情報を提供する。

Ⅲ 成果と課題

○ 今回の研修において、より多角的・多面的に子どもを見て、その子どもの持つ強みを引き出すことの大切さについて理解することができた。

○ 演習を通し、保護者・子どもとの合意形成をどのように図るかを学ぶことができた。

▲ 子どもの進路に関する一貫した指導・支援に向けて、家庭と学校との連携を図る必要がある。

(河北中学校 吉田 匠)

保健部会

I テーマ

『養護教諭の執務の向上』



II 活動内容

- 第1回 令和7年5月7日（水） ・今年度の研修テーマと研修計画についての話し合い
第2回 令和7年10月23日（木） ・研修会 ※詳細は下記参照
第3回 令和8年1月22日（木） ・今年度の反省と来年度の研修についての話し合い

1 第2回保健部会【研修会】について

(1) 日時・場所 令和7年10月23日（木）

14:30～16:30 河北町役場301会議室

(2) 講話テーマ 「がん教育を考えよう ～がん看護体験から伝えたいこと～」

(3) 講師 一般財団法人三友堂病院 地域緩和ケアサポートセンター

看護師長 がん看護専門看護師 認定がん専門相談員

松田 芳美 氏

(4) 講話の内容

①がんの基礎知識とわが国の現状

- ・がんとは、私たちの体を作る細胞ががん化したもので、個のがん細胞が繰り返し分裂して「がん組織」を作り、病気として現れるもの。
- ・日本人の2人に1人が一生のうちにがんと診断される時代になっている。
- ・がんになったから人生終わりではなく、残りの人生をがんと共に生きてゆく「がんサバイバーシップ」についてもっと知る必要がある。

②学校における「がん教育」を考える

- ・がん教育とは、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である。
- ・がん罹患者やがん患者の家族への十分な配慮をしながら、外部講師を活用する。

③がんの親を持つ子どもの支援

- ・支援の本質は、その子どもが安心できるように支えること。

- ・子どもの日常生活を維持しながら、家族の一員としてできることを子どもと一緒に考える。
- ・学校だけではなく、医療機関や子どもに関する公的相談機関で連携し、子どもを支えていくことが大切である。

(5) 講演をお聞きしての感想（一部抜粋）

- ・今回の研修を通して、初めてがん教育を身近なものとして感じる事ができた。ぜひ積極的に外部講師を活用しながら、自他の健康と命の大切さを考えられるような授業をしていきたいと思った。
- ・がん教育の基本知識や支援のあり方などについて学ぶことができ大変勉強になった。小学校では、「病気の予防」の単元で少しがんについてふれる程度だったため、がん教育を主体とした授業を実施したことはなかった。今回、外部講師との連携などについても詳しく話を聞くことができたため、今後がん教育を実施する際にはぜひ参考にしたいと思う。また、発達段階を考えると、小学校ではがんの専門知識よりも健康の大切さを、そして実際に家庭内にがんサバイバーがいる児童生徒への個別支援を特に大切にしていきたいと感じた。
- ・私たち大人や子どもたちの身の回りでもがん患者は多く存在しているので、このような教育は大事だと感じた。ただ、具体的に取組もうとすると少々難しい。
- ・がん疾患の発生要因からがん教育の学校における法的位置づけ、がん患者の親を持つ子どもの支援などわかりやすく講演していただいた。より具体的な内容であったため、がん患者の親を持つ子どもへの支援は、実際の場面で活用していけると思った。また、身近にがん専門看護師・認定がん専門相談員さんがおり、心強いと思った。
- ・がんという言葉への恐怖や偏見を減らすためには子どもが安心して話せる関係や環境づくりが重要であり、情報を隠すのではなく、年齢に応じた説明や言葉がけが必要なのだと感じた。保健室は日常的に子どもが立ち寄る場なので、相談のハードルを下げて気持ちが表出できる雰囲気づくりを意識したいと思う。

Ⅲ 成果と課題（○成果 ▲課題）

- 5年後の町内小学校統合に向けて、就学時健康診断や健康カード配付方法の見直しなど、共通理解を図りながら、事務の効率化を進めることができた。
- がんに対する知識を深め、がん教育の推進の仕方について学ぶことができた。河北町の子どもたちが心身共に健康で幸せに生き抜いていく力を身につけられるよう尽力したい。
- ▲「がん教育」について、今回の研修で得た学びを各校の実態に応じて実践していく。

（谷地中部小学校 加藤 志穂）

幼小連携部会

I テーマ

「幼児教育と小学校教育のつながりのあり方について」

II 活動の内容

1 第1回幼小連携部会

- (1) 日時 令和7年6月30日(月)
前半 9:30～11:00
後半 14:30～16:40
- (2) 場所 前半 かほくあいこども園
後半 河北町立谷地西部小学校
- (3) 内容



【保育参観】 自由活動 0～5歳児

【講義】 国や県の動向～幼こ保小連携～ 幼こ保小連携を進めていくために
村山教育事務所 指導主事 梶沼 瞳 氏

- ① 国の動向としては、令和6年10月に「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告」が出されている。その中では、「幼児期においては、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要。」と記されている。幼児教育と小学校教育との円滑な接続については、『国には、「幼保小の架け橋プログラム」を推進しており、一部の地域では、子どもの主体的な姿がより見られるようになってきているなどの成果が上がっている。しかし、全国的にみると未だ不十分である。』とある。
- ② 県としては、県作成リーフレット「つなぐ」や幼小通信で、「事例を通して学ぶこと」ができるようにしている。第7次山形県教育振興計画でも方針1「一人ひとりが自分らしく可能性にチャレンジできる学びを実現する」で幼児教育の推進を重点に挙げている。令和8年度以降には、「幼児教育センター（仮称）」を立ち上げ、幼児教育アドバイザーの派遣を計画している。
- ③ 幼児教育では、遊びを通じた直接的体験から、生きる力の土台となる資質・能力を育む。小学校では、学級を中心とした集団における指導になるが、スタートカリキュラムを実施し、「学ぶことが楽しい。学びが遊び。」というような緩やかなスタートにする。

(4) 感想

- ・幼児教育で大切にしていることを、実際の保育を通して小学校の先生方に感じていただけてよかった。子どもの育ちを見通し、発達段階に応じた関わりが大切だと改めて感じた。

- ・かほくあいこども園での参観、情報共有、梶沼先生のお話を通して、幼児期の学びが小学校での学びにどう繋がっていくかがより明確になった。
- ・グループ討議では、小学校の先生方と話し合う中で、園で行っていることが学校につながっていることを感じる事ができた。

2 第2回幼小連携部会

(1) 日 時 令和7年11月25日(火)

13:30～16:30

(2) 場 所 河北町立西里小学校 食堂

(3) 内 容

【授業参観】 1～6年 授業参観

【講義】 「幼小をつなぐために」～南部小の実践を通して

寒河江市立南部小学校 校長 白田 敏幸 氏

①南部小学校の「スタートカリキュラム」で取り入れた教育活動は、「①幼稚園、保育園からのつながりある活動 ②生活科を中心にカリキュラムを構成 ③子どもたちと一緒に話し合う時間(考えさせる時間) ④子どもの興味・関心から教科につなげる」である。そして、この活動の場として「はっけんタイム」「はなしあいタイム」「きょうかタイム」を設定した。

②1年生の指導では、「苦手なものをなくす」だけにならないように気をつけ、「あなたは、今何がしたいの?」と問うことで、自分で考えて行動できる力を育成していく。また、子どもの行動をよく見て、課題を教科の学習のめあてにするなど、「遊び」から「学び」へつなげていく。

(4) 感 想

- ・西里小の授業参観では、子どもたちの姿、環境などが園とのつながりもあり、今やっていることが学校での生活につながっているのだと安心した。
- ・白田校長のお話を聞いて、今、私たちが実践していることが「これでいいんだな」と再確認でき、「こんなことにも挑戦してみたい」という思いが明確になり、とても学び多き時間だった。
- ・架け橋プログラムをもとにした話し合いをすることで、よりこども園、幼稚園での活動を小学校生活に活かしていけると感じた。



Ⅲ 成果と課題

○園と小学校の先生が、双方の学習・活動を参観したり、グループ討議で情報交換をしたりすることで、指導法や課題に対しての対処法を共有することができた。

▲小学校統合に向けて、園や小学校での子どもの実態を交流し合い、幼小連携部会として「河北町として育てたい子どもの姿」について考えていく。

(谷地西部小学校 佐藤 和也)

公開授業研究会

河北中学校

I 研究主題

生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成(4年次)

II 主題設定の理由

本校の学校教育目標である「つながりの中で自立する生徒の育成」を踏まえ、上記の研究主題を設定し、研鑽に励んできた。

本校の生徒は、素直さと真面目さを生かして、さまざまな活動に意欲的に取り組むことができる反面、先が見えないことに対して、失敗を恐れて指示待ちになったり、積極性に欠けたりする一面も見られる。こうした生徒の実態を踏まえ、学校全体で教科を通して育みたい具体的な「自立に向かう生徒の姿」を、

①課題意識を持ち、周囲とのつながりから学び、自己表現する生徒

②目標に向かって、自らの学びを振り返り、工夫・改善する生徒

とし、アクションプランを活用しながら、「自己調整力・レジリエンス」「思考力・判断力・表現力」「自己肯定感・他者理解」「コミュニケーション力」を相互に関連づけ、その具現化を目指すものである。

III 研究の実際

1 研究の視点

研究主題に迫るために、以下の【視点】を重視して研究にあたる。

【視点】表現力を高める言語活動の工夫 ～話す・書くを中心に～

これまでの研究の成果を生かしながら、「表現力」に焦点を当て、研究を推進する。「表現力」の醸成には、主体性はもちろん、他者とのつながりや対話、振り返りによる自己調整力も重要な要素になると考える。また、それらを通して仲間との結びつきを強くし、自己肯定感の高まりも期待できると考える。生徒の目線に立って言語活動を見つめ直すことで学習意欲を喚起し、自ら考え、主体的に行動する力の醸成と生徒の表現力の向上を目指したい。また、強化ポイントとして「問い返し」を掲げ、表現力のさらなる深化へとつなげたい。

これまでも大切にしてきた「基礎基本の定着」を根底に置きながら、以上の【視点】を持って研究を進め、研究主題である「生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成」に迫っていく。

2 授業参観とグループ協議の視点

授業を参観する際のポイントを「生徒の姿」に置き、表情や仕草、反応や発言から、考えの変容や深まり、成果や課題を見出していくことで、より「生徒」の目線に立った授業づくりを目指す。また、事後研究会の際には「①研究の視点に沿った授業づくりについて」「②『問い返し』について」の二つの視点で協議を進め、研究内容の深まりを目指す。

3 公開授業研究会

今年度の公開授業研究会では、各学年で一つずつ授業を公開した。たくさんの先生方に生徒の姿を見ていただき、その発言や様子から学びの広がりや深まりについてご意見をいただいた。

(1) 3年生 社会科 単元名「消費生活と経済」

グループ協議でのご意見

①研究の視点に沿った授業づくりについて

- 学級全体の雰囲気がよく、授業時のロールプレイや活動の積極性につながっていた。
- 前時までの知識を生かした（つながりが生かされた）発表になっていた。
- 社会科としての知識の定着が進んでいる発言や記述が多く見られた。
- ▲本単元は家庭科との関連が図られる部分もあり、まとめの際に教科での差別化をどのようにしていくのが課題である。

②「問い返し」について

- 生徒同士の問い返しが活発でよかった。
- ▲教員からの問い返しをどのように仕組んでいくのが課題である。
- ▲先生と生徒の間での知識の確認や、授業後の意見の変容の確認する場があると良い。
- ☆ロイロを用いた共有に意図、意味を持たせたい。
- ☆問題事例のバリエーションを増やしたり、自由に課題を考えられたりするとより学びが深まると考える。

(2) 2年生 道徳科 主題名「より良い社会を目指して」

グループ協議でのご意見

①研究の視点に沿った授業づくりについて

- 心情円を用いたことで賛成—反対の0 or 1 0 0 %でなく、多様な考えを持つことができていた。
- 途中でグループの構成を変えたのが良かった。より多くの考えを知る機会になった。
- 初めに提示した「社会の広がり」の図が効果的だった。
- 「カメラがないと守れないマナーって何なの？」という生徒の意見を取り上げたことで生徒の視点が社会に向かった。
- ▲個人で考えた後にペアで意見を交換するなど考えを語る機会がさらにあった方が良い。
- ▲完全に1 0 0 %にならない理由をもっと深めさせたかった。中間の考えを引き出したかった。

☆カメラの有無の善し悪しで終わらずに、最初に提示した「社会の広がり」の図に戻って社会と自分に目を向けさせると良かったのではないかな。

☆マンションの防犯カメラだけではなく、もう一つプライバシーが侵害される例などの資料があればより多面的な考えを引き出したのではないかな。

☆ルールの監視とマナーの監視の違いが生徒の中ではっきりしていなかった。ここを押さえておくにより身近な自分事として考えられたのではないかな。

☆グループワークの必要感がほしかった。賛成でも100%にならない理由等を交流させると良かったのではないかな。“モヤモヤ”を言語化させたかった。

②「問い返し」について

○問い返しを意図的に行ったことで、生徒の考えの変容と成長が見られた。

▲カメラの有無から住みよい社会へ目を向けられるような問い返しがあると良かった。

☆生徒同士の問い返しがあればよかった。それを生み出せるようなグループ交流の工夫があると良い。

(3) 1年生 音楽科 題材名「だれもが気持ちよく過ごせる社会を目指して」

グループ協議でのご意見

①研究の視点に沿った授業づくりについて

○音楽的特徴を意識させながら「推しポイント」を書かせるという課題は、生徒の意欲を引き出す良い課題設定だった。

○ICTの活用や教材の工夫がたくさん見られた。タブレットで一人ひとり楽曲を聞いたり楽譜に○分△秒と書いてあったりする等、生徒が音楽に集中する支援が豊富だった。

○グループで自由に発言しあうことができる学級の雰囲気素晴らしかった。

▲タブレットで自由に楽曲を聴くことができる工夫はよかったが、音が混ざって聞きづらそうにしている生徒もいた。可能ならばイヤホン等を用いてより聞き取りやすい環境を整えられるとよかった。

▲鑑賞のポイント（音色・旋律・強弱等）を明確にすることで、生徒たちはもっと考えやすくなったのではないかな。

②「問い返し」について

○先生の問い返しがとても有効に機能していた。生徒から吸い上げた意見を、「どう思う？」「もう一回グループで話してみて」等、全体に戻す場面がとてもよかった。生徒の考えが深まっていた。

○問い返しによって、生徒が自分の考えを言語化していく過程がみられた。

▲生徒の意見の共有方法を工夫するともっと良かった。「生徒→教師→全体」の流れだけではなく、「生徒→全体」や、ロイロノートを活用して共有するなどするとより考えが深まったのではないかな。

▲友達と意見を共有したときに、自分の考えが変容したり、新たに気づいたことがあったりするとさらに良かった。

IV 成果と課題

- 多くの先生方から授業を見ていただき、校種・教科横断的な視点での情報交換ができた。
 - すべての学年を公開したことにより、生徒の成長の過程を見ていただくことができた。
 - 授業参観の視点を焦点化したことで、教師側の視点と生徒側の視点を比較しながら、より「子どもを中心に置いた」改善の手立てを検討することができた。
 - 小学校での学習活動や学習習慣について情報を得ることで、中学校とより密接に連携がなされ、さらなる力の上積みにつながると感じた。
- ▲小学校での実践や、多様な視点からの意見は大変学びの多いことであった。さらなる力の高まりや、力の上積みのために、「小と小」「小と中」の交流をさらに深めていければと感じた。

(高橋 拓也)



学校研究

I 研究主題

自ら学びをつくる子どもの育成（４年次）

— 子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して —

II 主題設定の理由

本校では、「自ら学びをつくる」を、「主体的に対話を重ねて考えを深めること」「新たな課題に粘り強く取り組むこと」「子ども自身が学ぶ力を身につけていくこと」と捉え、３年間にわたり研究を進めてきた。困難な状況においても、自ら考え判断し、他者と協働しながら解決策を模索し、状況を切り拓いていく子どもの育成をねらいとしている。その基盤となるのは、多様性を認め合い、互いの表現を受容し合う学級集団である。本校では、主体的な授業づくりとあたたかな学級づくりを両輪として研究に取り組んできた。

一方、本校の児童は、自分の考えを相手に分かるように伝えたり、相手の意見を受けて考えを深めたりする対話の面には課題が見られる。また、少人数学級による人間関係の固定化から、自分の意見を抑えたり、判断を他者に委ねたりする傾向もある。こうした実態を踏まえ、対話を通して自分の考えを明確にし、仲間と協働しながら学びを深める力を育成する必要があると考え、本主題を設定した。

III 研究の実際

1 研究の視点

- ①問いを起点とする学び
- ②対話を通して考えを深める
- ③思考を可視化する活動の設計
- ④振り返りによる内省と成長の実感
- ⑤自分ごととしてとらえる学びのデザイン



2 各学年の取組み

学年	教科と単元名	主な成果（○）と課題（▲）
一年	道徳「したいことがあるときには」	○役割演技を通して、かぼちゃの気持ちを考えさせることで、かぼちゃになりきって素直な気持ちを表現することができた。 ○導入で自分の体験談を聞くことで、自分ごととして考えることができた。 ▲子どもたちが葛藤するような問い返しができるようになった。
二年	図画工作「あきからのおくりもの」	○目的に応じて、自然とグループができたり、一人で取り組んだりするなど、子どもたち同士の関わりが生まれていた。 ○材料の色や形などに注目して、他のものに見立てたり形作ったりする様子が見られた。 ▲自然物を使うことがメインの活動になるよう、材料の吟味が必要だった。

三年	<p>体育 表現運動「表現の世界へLet' s GO！」</p> <p>○合同体育（3年・4年）を行ったことで、より多様なアイデアが生まれ たり、異学年交流を図ったりすることができた。</p> <p>○「体・空間・リズム・関わり」の4つのくずしを掲示したことで、表現の 工夫を考えたり、振り返る際の拠り所となったりした。</p> <p>▲振り返りの視点を共有しておく、学習の深まりが出たのではないか。</p>
四年	<p>社会「ごみのしよりと利用」</p> <p>○単元全体を貫く学習問題とともに、一人ひとりの追求したい課題を常時掲 示したことで、児童の学習意欲を継続し、「問いを起点とする学び」につ ながることができた。</p> <p>○個人ごとにタブレットを使用し、クリーンピア共立のごみ処理動画を視聴 したことで、個別化を図りながら、全体交流の際には、考えを深めるため の共通の資料とすることができた。</p> <p>▲「対話を通して考えを深める」ため、お互いの考えの相違点を「比較して いく精度」をあげる支援が必要であった。</p>
五年	<p>社会「自動車を作る工業」</p> <p>○単元の導入として、外国で日本車がたくさん使われている写真を用いたこ とによって、どのような学習をしていくのか見通しを持つことができた。</p> <p>○「先生が乗っている車」「家の人が乗っている車」の調査結果を提示した ことで、より身近な課題としてとらえることができた。</p> <p>▲様々な資料を提示したものの、資料の読み取りで終わってしまった。児童 のつぶやきや疑問を拾うことで、より深めることができたのではないか。</p>
六年	<p>家庭科「こんだてを工夫して」</p> <p>○献立を見直すポイントを示すことで、多様な視点で献立改善に向けた意見 交換ができた。</p> <p>○栄養のバランスや献立の全体像が明確になるようにワークシートを工夫し たことで、相手の考えを理解し共有しやすかった。</p> <p>▲誰のための献立なのかという相手意識を高めたり、グループでの献立作 り、見直しなどを取り入れたりすることで、より話合いの内容が広がり、 交流の深まりが期待できる。</p>

IV 成果と課題

- 児童が学習を自分ごととして捉え、主体的に関わろうとする姿が多くの授業で見られた。主体的な授業づくりとあたたかな学級づくりを両輪として研究に取り組んできた成果として、自分の考えを伝え合ったり、素直に表現し合ったりできる雰囲気が出来上がってきている。
- 活動の目的や見通しがはっきりしていることによって、子どもたちが自然と関わり合いながら、学習を進めることができるようになってきており、多様な考えや表現が引き出されていた。
- ▲対話を通して考えを「深める」という点においては、課題が残った。
意見を出し合う活動は行われていたものの、子ども同士が自分と友達の考えの相違点に気づいたり、質問し合ったりすることを通して、考えをよりよいものへと深めていく段階までには至らない場面が見られた。
今後は、対話を通して考えを深めていけるよう、必要な支援の在り方を検討するとともに、問い返しを行うなど、教師がファシリテーターとして果たす役割について、さらに研究を進めていく必要がある。

(大泉 晃子)

I 研究主題

自ら学び続ける子どもの育成（6年次）

II 主題設定の理由

(1) 学校教育目標

ふるさとだいすき	・・・	ふるさとについて理解を深め 行動をする子ども
かしこく	・・・	主体的に楽しく学び よりよいものを創造する子ども
つよく	・・・	心身とも健康で ねばり強く取り組む子ども
やさしく	・・・	自他を大切にし 思いやりのある子ども

(2) 昨年度までの研究から

本校では昨年度、各担任が目指す子どもの姿を明らかにしながら児童の実態に応じて個人研究テーマを設定して授業改善を行った。その結果、「課題を自分事として捉えて学習に臨んだ」「行事や学習に対してやってみたいと提案したり挑戦したりした」など一定の成果が見られた。その一方で、「より発展的な学習に取り組んだり創意工夫して表現したりする力が弱い」「学びが学級や学校で閉じてしまうことがある」という課題も残った。以上のことから、学校教育目標の具現化に向けた研究の方向性に間違いはないということ、児童の主体性を更に伸ばしていく必要があることが確認できた。

そこで、今年度も研究主題「自ら学び続ける子どもの育成」を継続するとともに、育成を目指す資質・能力の重点を「主体性」とし、各学級の担任が児童の実態に合わせて個人研究テーマを設けて研究に臨むこととした。さらに、つながる力を育てる「つなぐ教育」を意識し、自らつながる力を身につけるため、学び・人・地域とつなぐための単元づくりを考えて計画した。

III 研究の実際

1年 国語科 おはなしをたのしもう「やくそく」

研究テーマ めあてに向かって、みんなで学びを楽しむ授業づくり

<手立て①> 単元のめあてと学びのプランを作り、見通しをもって学習に取り組む

◇単元のめあて「おんどくたからばこをつくろう！」を設定したことにより、来年度の就学児や地区内の介護老人保健施設等で発表するため、意欲的に学習に取り組むことができた。しかし、初めて子どもたちと学びのプラン作りに取り組み、単元計画に加えて、つけたい力を共有することはとても難しかった。タブレットで自分の音読の姿を見ることにより、「上手に読めるようになりたい。」と、繰り返し音読練習をする姿が見られ、授業以外でも音読を楽しもうとする姿が見られた。

<手立て②> 会話文を基にして詳しく読んでいくことを繰り返し、登場人物の気持ちを想像しながら読む楽しさを味わう。

◇会話文の話者を確認したことにより、だれが（主語）、どうしたのか（述語）をおさえることができた。この物語の会話文は、登場人物の気持ちを想像しやすい言葉なので、会話文を基にして、自分のことばかり考えている3匹のあおむしたちの気持ちを詳しく読むことに有効であった。しかし、本時は、前時とは違い、仲直りして「やくそく」するまでの場面を扱ったため、読み取りに様々な難しさがあった。

3年 総合的な学習の時間 だれでも楽しい動物園プロジェクト

研究テーマ 問いをもって課題を設定し、地域や友達と学び合う子ども

〈手立て①〉 これまでの知識や体験から問いを見だし、課題設定するための提示や生活とのつながり

◇これまで学習してきたことをいつでも振り返ることができるように、学習してきたことをファイルやロイノートに蓄積したり、教室に掲示したりした。また、問いが生まれるような情報を提示したり、問い返しをしたりしたことで、付箋に問いをもったときにメモする児童も見られた。総合に限らず、他教科でも生活と結びつけながら問いを見い出して課題を設定し、主体的に取り組むことができた。

〈手立て②〉 地域や友達とつながり、互いのよさを生かすための場や明確な視点

◇目的や相手意識をもって学習するため、飼育員やお客さんの思いを聞き、願いや思いをもとに課題を設定した。目的や相手を意識しながら表現する力を身につけるために、発表する場を設けた。自分たちで考えたことが実現できたという達成感、地域の大人とつながりながら学習することの楽しさや大切さを実感することができた。一方、子ども同士で互いの考えのよさを生かして学び合うために、付箋を使って自分の考えをもった上で交流したり、フィードバックの視点を明確にしたりしたが、必要感のある交流や視点の精選が必要だった。

5年 算数科 図形の角の大きさを調べよう

研究テーマ 根拠をもって自分の考えを表現し、みんなでつながる授業づくり

〈手立て①〉 根拠をもって考えを表現するための見通しとキーワードの掲示

◇導入で見通しを丁寧に示したことで、一人ひとりが自分の考えをもつことができた。また、説明するときのキーワードを掲示したことで、交流の際にそれらを用いて説明しようとしていた。例えば、四角形の内角の和を求めるために、対角線を2本引いて三角形4つに分けて考えた場合、「対角線」や「三角形」というキーワードを用いたり、中心部分の必要のない角度について「円」、「丸」という言葉を使ったりして考えていた。さらに、問い返しを多くしたことで児童の思考が刺激され、自分の考えを表現することにつながった。一方、全体交流やまとめ、振り返りの時間が十分に確保できなかった。

〈手立て②〉 みんなでつながるための交流の場の設定やタブレットPCの活用

◇個→ペア・グループ→全体に発展させたことで、全体でも説明してみようという自信につながったが、学ぶ時間を確保するのであれば、個→全体へとつなげる方法もあった。全体交流で教室の前方に集まる場を設定したことで、みんなで解決しようという意識につながり、子ども同士の言葉でつながっていた。タブレットは様々な試行錯誤ができ有効だった。ノートにも学習シートを貼り、学びの足跡として残すことができた。しかし、教師がヒントを与えすぎてしまった部分もあったため、適切な出と待ちが必要であった。

IV 成果と課題

- 各担任がその学年や児童に合った研究テーマを設定したことで、実態に合った単元構成や課題を設定することができた。さらに、児童同士や異学年のつながり、地域とのつながりなどの単元構成や課題設定を児童と共に設定することで、児童が課題を自分事として捉え主体的に学習に臨む児童が増えてきている。
- ペアやグループ、全体で自分の考えを表現する活動を学年に合わせて繰り返し行ったことで、主体的に友達の意見や様子から自分の言葉で思いや考えを表現している児童が増えてきている。さらに力を伸ばせるよう、指導者側が適切な「出と待ち」を意識し、交流のねらいをもちながら児童が生き生きと学び続ける場の設定を心がけていく。
- ▲児童と共に課題設定や単元構成を考えて自ら学びを創ることを意図して取り組んできたが、まだ学びや交流に対する必要感が高まっていない。教師側が意図やねらいをもち、学びや交流を仕組んでいけば児童の主体性をより高めることができる。教師は児童に任せる場面を意識しつつ、児童同士の話し合いのスキルを高める指導を行うことも重要である。

(阿部 まな美)

I 研究主題

仲間と関わりながら、学び方を身に付ける子どもを育てる
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～

II 主題設定の理由

本校は「Challenge & Thinking ～前に踏み出し チーム力を高め 考え抜く中部の子」を学校教育目標として掲げている。この目標を具現化するために、二つの視点を意識して研究を進める。「仲間と関わりながら」では、自分で考えたことを意見交換したり、議論したりする場を流動的に設け、新たな考え方に気づき、自己の変容の自覚へとつなげる。小学校という小さなコミュニティの中でも、子どもたちは対話力を継続的に身に付ける必要があると考える。「学び方を身に付ける」においては、学び方のサイクルである《課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現》を生活の中の様々な場面で意識させていく。このサイクルが日常化し身近なものになり、実生活での課題解決や危機管理にも役立ち、自らの楽しみや幸せを生み出すサイクルにも有用ではないかと考え、授業・教材研究に取り組んでいく。

<授業改善の主な視点>

- 課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫
- 課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫
- 自分や友達の良さや成長を実感できるための工夫

III 研究の実際 7月計画指導訪問から、11月『単元でつながる授業研究』へ

『単元でつながる授業研究』（一つの単元を複数の教諭が一教時ずつリレー形式でつないでいく授業形式）

《ねらい》授業研究を授業力と学力の向上に結びつけるために、同一単元内で複数の指導者が授業をつないでいく授業研究を行う。複数で授業をつなぐことで、教材観を明確にもつことや授業力向上により自分ごととして取り組み、子どもたちの学力向上につなげることを目的に設定した。

《テーマ》深い理解を図る学び～資質・能力向上の授業を描く～その先には学力向上
4年算数「分数をくわしく調べよう～この学習を通して説明名人になろう」

第4学年の実践 算数「角の大きさ」 計画指導訪問事後研でのご指導をもとに

<課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫>

- ・前時までの振り返りは児童に委ねる。本時でしっかり教えるところで教師が出る。
- ・児童のつぶやきを授業に組み入れることで、課題へより没頭して取り組むことができる。
- ・「考え方」を書くことは難しいので、何を書くとよいのかの例示が必要である。

<課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

- ・答えは間違っているが、考え方の方向性が正しい児童を取り上げ、どのポイントが違っているのか考える場面や児童のつまづきをみとり考えさせる場面を設ける。

<自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

- ・振り返りはなぜ必要なのか、振り返ることの価値を児童と教師が共有しておくことで、振り返りの幅や深みが増す。

第4学年の実践 算数「分数をくわしく調べよう～この学習を通して説明名人になろう」

<課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫>

- ・夢中になって課題解決に取り組む姿
 - 授業開始時刻が徹底され、学習に臨む態度が改善された。
 - 授業中の私語が減少した。
 - ワークテストの点数が向上した。中間層に位置する児童が8～9割の得点を取ることができた。



<課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

- ・単元を通して育成を目指した力が、他単元・他教科にも波及
 - 算数科の面積を求める単元や国語科での学習（自分の意見を言語化する・相手の意見を聞く・聞いたことをもとに自分の考えを再構築する）において、必要感のある対話や協働する姿が見られた。



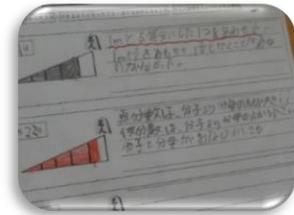
<自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

- ・視点を定めた振り返りとバロメーターの活用
 - 単元を通して振り返りの視点を定めたことで、全教時の振り返りに一貫性があった。
 - 児童も自分の成長をバロメーターと関連づけて、言語化することができた。



<単元でつながる授業を行ってみて>

- ☆他の先生方の問いかけ、時間配分、教材研究など多方面で学ぶことが多かった。
- ☆児童の実態が（担任外の教諭は）あまり分からない状況で、教材に重点的に目を向ける機会となってよかった。
- ◎教諭間での教材観の共有⇒児童の学習に向かう意欲の向上をもたらす一因ともなりうる。
- ☆算数科の系統性についての視点も持つことができた。
- ☆教員それぞれの個性（児童のつぶやきの取り上げ方、導入から課題へのつなぎ方など）が一つの単元内で見ることができ、大変勉強になった。



Ⅲ 成果と課題 今年度は計画指導訪問や早稲田大学小林宏己名誉教授通覧などご指導いただき機会に恵まれました。次年度の学校研究につなげていきたいと思っております。

- 教材に目を向けることで、教科の本質に迫ることができ、児童の変容につながった。
- 課題設定⇒情報収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現の学びのスパイラルを身に付けた児童が、その学び方を他教科にも広げ、そこから深い学びへ近づいている。
- 学校教育目標の重点である「前に踏み出す力・チーム力・考え抜く力」の3つの力を意識した授業や振り返りを行ってきたことで、児童の意識が高まってきた。
- 単元をつなぐ授業づくりによる「自分ごと」が全体の授業力向上につながった。
- 児童の特性を理解したり、児童の思考を深めたりするための「見取りの目と教師の出」の質の向上を学校全体で目指していく。
- 単元の計画とゴールを児童と共有し、個別最適な学びと協働的な学びを単元全体で一体化させていく。
- リフレクション（振り返り）による、次時への課題意識向上をねらう。まずは文章量を増やすところから始めて、徐々に内容の質を高めていく。

（軽部 亜希子）

I 研究主題

深い学びの実現を目指して
～単元デザインを核とした授業づくり～（2年次）

II 主題設定の理由

本校は、「ふるさとを愛し、未来をしなやかに生き抜く谷地南部っ子の育成」を学校教育目標に掲げ、「言葉」「自立」の経営キーワードをもとに教育活動を推進している。

学校教育目標と本校の児童の実態を踏まえ、研究テーマを昨年度に引き続き、「深い学びの実現を目指して～単元デザインを核とした授業づくり～（2年次）」と設定した。

昨年度までの取組みで、各学年の思考力や「かく力」の伸びが見られ、大きな成果を得ることができた。しかし、一方で、さらなる学力向上に向けて、学ぶ意欲や粘り強さ等の個人差の拡大、基礎基本の未定着といった課題も残っている。そこで、「かく力の育成」

「主体的な家庭学習」「個に応じた単元デザイン」の研究視点を重視しながら授業改善を継続することで、誰一人取り残すことなく学力の向上を目指すため、上記のような研究テーマを設定した。

III 研究の実際

第2学年 算数科「九九をつくろう」

☆学校研究とかかわらせて（教師の手立て）

①見通しを持って主体的に学習に向かうために

毎時間の学習の流れをパターン化し、子どもたちが見通しを持って学習を進めることができるようにした。また、子どもたちの気づきを丁寧に取り上げ、授業展開に反映させていくことで児童の主体的な学びの環境をつくることができた。

②個々の学びをそれぞれに深めるために

自力解決の時間においては、個人・ペア等、学習の進め方を自己選択させるとともに、ペア交流の場も認めることで、子どもたちが交流を繰り返しながら多様な解決方法に触れたり、説明し合ったりすることで一層理解を深めたりできるようにした。その際、自分の課題に合わせて交流相手を自己選択できるように、ネームカードを活用し、目的を明確にした交流を図ることができた。

（実践の考察）

○導入で子どもたちを引きつけることができ、解決に向かう必要感のある課題設定を行うことができた。

○子どもたちが目的をもって交流の仕方等を自己選択できた。



- ▲「かく活動」の充実をもっと図る必要を感じた。算数ならではの用語を活用しながら説明を書かせることで、より確かな学力につなげたい。
- ▲かけ算を使うことの良さをみんなで共有するために、「どうしてかけ算を使うのか」、「この考え方のどこに良さがあるのか」をしっかりと吟味させたい。
→身近なもので使える場面を多く設定していく。

第6学年 国語科「宮沢賢治作品の世界にどっぷり浸る、「推し本トーク」をしよう。

「やまなし」 【資料】「イーハトーヴの夢」

☆学校研究とかかわらせて（教師の手立て）

①読む力と言語化する力を育成するために

物語の全体像を具体的に想像したり、表現の工夫や効果を感じさせたりしていくことを単元全体として意識した。また、学習の見通しを持って作品世界について考えたことを交流させた。

②比べて考える力を育成するために

作者の人生観を理解し、他の作品と比較したり作品の世界観から想像を広げたりして、作品に込められた思いについて考えられるようにした。

また、自分の考えを伝えるだけでなく、友達の考えと比べて共通部分や違う部分について考えられるようにし、自分の読みの深まりを実感することができた。

（実践の考察）

○推し本トーク（読書会）の方法を示すため、モデル動画を事前に見せていたことが効果的だった。

○自分の本との共通点を見つけたり、作者が作品に込めた思いなどを考えたりしながら交流することができた。

▲推し本を紹介する時に、あらすじや内容の説明をすることで精一杯の児童が多かった。

→同じ本を読んだ人同士の交流にしたり、本の種類を絞ったりするとより活発な交流になるのではないか。

▲読書経験を増やしていきたい。読書量の確保と、系統性を意識した言語指導が大切であることを再認識した。



IV 成果と課題

○特別支援教育の視点を意識しながら、個に寄り添った単元デザインを行うことができた。

（学級の実態をより適正につかむ力の向上にもつなげることができた）

○深い学びにつなげる活動を経て、「なぜ」「どうしてそう考えたか」を言語化できるようになってきた児童が増えてきた。

▲来年度の授業改善の視点の1つとして、長い文章を書いたり読んだりする力をさらに育てていく。特に、相手や目的に合わせた文章を構成する力や、言葉で相手に説明したり伝えたりできる力の育成を目指していきたい。

（田口 新）

I 研究主題

一人ひとりが 自分らしく育つ授業づくり

II 主題設定の理由

本校の学校教育目標「一人ひとりが自分らしく育つ学校づくり」実現に向けて、全ての子どもの学びを保障することが重要だと考え、この研究主題を設定した。子ども一人ひとりの学びを把握した上で必要な支援を判断すること、子どもの思考の流れを大切にし、子どもと共に授業をつくること、そして、ICT機器の活用により個別最適な学びを実現することを目指している。

また、「自分らしく育つ」とは、「自分で考え、決定して行動できる」ことをねらいとしている。自分の思いや考えを言葉で伝えるように表現し、さらに子ども同士が話し合いを進められるようにしたいと考えた。根拠をもとに説明し、論理的な思考で課題を解決していけるような学習の支援の仕方を工夫していく。そうすることで、言葉を通して双方向につながり、仲間と学び合う楽しさを味わい、学びを深めようとする態度を育てられると考えた。

III 研究の実際

1 授業の実践

(1) 5・6年特別の教科道徳 資料「うばわれた自由」A 善悪の判断、自律、自由と責任

「自由」について、自由度を数値化して表現させる活動を取り入れた。数値で示すことで、自分の考えを明確にするとともに、友達との比較が可能となり、意見交流の活性化につながった。しかし、自由の定義が子どもによって異なっていたため、「良い自由」と「悪い自由」といった表現が子どもから出され、本時のねらいとはややずれる結果となった。数値化の意図や有効性について、教師自身がより深く理解して活用する必要を感じた。

(2) 3・4年音楽科 「音のとくちょうに注目して、音楽をつくろう」

打楽器の音を生かして、4パターンの鳴らし方を組み合わせ、テーマに沿った音楽をつくった。ICT機器を使い、3種類の打楽器のリズムパターンを変えながら、重なり合う音を合奏した。聴こえる音がテーマに近づくよう、いろいろな楽器を試しながら打楽器音楽をつくっていった。鳴らし方を工夫す



ることで、「〇〇みたいだ。」「強弱をつけたらどうだろう。」など、子どもたちが自由に試すことができる楽しさがあった。

(3) 2年学習室国語科 「ペープサートを使って順序よく友達に伝えよう」

自立活動でペープサート作りに取り組み、これまでの学習との関連を意識させた。国語では、出来上がったペープサートを黒板に並べて話の流れを確かめた。絵と話の流れを結びつけることに興味深く取り組む姿が見られた。「はらぺこあおむし」の3つの場面に関心をもち、あおむしの動きや言葉を一緒に考えることに取り組んだ。



(4) 2年算数科 「九九をつくろう」

かけ算の長い単元を、楽しみながら学んでいけるようにしたいと考え、子どもたちにとって遊び感覚で学べる活動や環境を工夫した。サイコロを振って出た目の数だけ九九を言ったり、九九ビンゴをしたり、九九を唱える場所や回数を選んでいく「九九修行の旅」などを行ったりした。

九九を覚えることに不安のあった子どもも、楽しみながら九九に親しむことができていた。また、生活の中からかけ算の式に表せる場面を見つける活動を行い、生活とのつながりを感じることができた。

(5) 1年国語科 「すきなところをしらせよう」

「たぬきの糸車」の学習と共に、いろいろな昔話を読むことに挑戦した。1年生にとって難しいのではないかと思ったが、子どもたちが知っているお話もあり、意欲的に読書する姿が見られた。しかし、子どもたちは、内容の大体を捉えてから好きなところを選ぶのではなく、挿絵や一部分を読んで選んでしまっていた。物語の全体のおもしろさを読み取れるような学び方を工夫したいと感じた。



IV 成果と課題

○子どもの意欲を大切にして授業を考え、子どもたちと共につけたい力を共有したことで、見通しをもって学習に向かうことができた。

○子どもも教師も「関わり」を大切にして、授業や学校生活に取り組んできたことで、周囲の人々と協力して考え、意欲的に課題に向かうようになってきた。また、その関わりから学びを広げることができた。

▲今年度の校内授業研究会では、国語や算数の複式授業を取り上げなかったが、子どもが主役で子どもたちがつくっていくような複式の授業のあり方を考えていきたい。

(原田 幸江)

I 研究主題

「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成
 ～ 一人ひとりがしっかり考え、みんなで学びをつないでいこう ～

II 主題設定の理由

本校は、研究テーマを「生き生きと学び続ける北谷地っ子の育成」と設定した。「生き生きと学び続ける」とは、子どもたち一人ひとりが学習のめあてや課題をもち、進んで追究し、自分の考えや思いを積極的に表現して、互いのよさを認め合い、また新たな課題に取り組んでいくことが繰り返される学習ととらえた。

これまでの児童の実態から主題に迫るために、また、子どもたち一人ひとりが進んで学習に取り組むために、これまで同様、課題をしっかりと把握できるように工夫を行い、今まで学んだことを活用して自分の考えを持つことができるような授業づくりを目指していく。さらに、根拠を基に自分の考えを友達と伝え合ったり、自分達の考えに疑問を投げかけたりする話し合いを通して、考えを広げたり深めたりできるようにして、研究主題の実現に迫っていくこととする。

III 研究の実際

1 研究の方法

- ・次の2つの視点を設け、研究・実践を推し進めた。

視点① 一人ひとりがしっかり考えていたか

視点② みんなで学びをつないでいたか

- ・各自が選んだ重点研究教科の授業を公開した。
- ・事後研究会では、2つの視点について児童の姿をもとに話し合いを進めた。
- ・学期末に「授業チェックシート」を活用し、指導者が自己の授業を振り返り、成果と課題を見つけ、授業改善に生かした。
- ・全国学調の問題を分析し、授業改善について話し合い、改善のポイントを共通理解した。



2 授業の実際

学年	教科と単元	主な成果 (○) と課題 (▲)
一年	生活科 「きたかぜとも なかよく なれるよ」	○前時の振り返りを思い出しながら本時の導入を行い、自分のめあてをしっかりと持って45分間集中して学習することができた。さらに、「もっとやりたい」ことが児童の中に生じ、活動の見通しをもつなど、次時への意欲につながった。 ○子どもたちに自己決定させたり、子どもの思いを引き出す問いかけをしたりしたことで、子どもたちが自分のアイディアや思いを言葉にして表現することができた。 ▲「比べる」「見つける」などの視点をより意識させ、気づきの質が高まるようにするために、教師も一人の学び手として、子どもたちと同じ目線で活動し、問いを投げかけるようにしたい。
二年	算数科 「九九を作ろう」	○ノートや掲示物を活用することで、一人ひとりが立式し、考え方を交流することができた。また、タブレットやホワイトボードを活用することで、自分と友達の考え方の類似点、相違点がわかりやすく、意味のある交流ができた。 ○自分と違う考え方にふれたとき、それを実物进行操作して受け入れようとする姿がみられた。 ▲子どもたちが自分の考えを持って交流に臨めるよう、既習の学習が生かせるような授業づくりや掲示、ノートの取り方などを工夫していくことが必要である。

三・四年 複式	<p>算数科（3学年） 「わり算を考えよう～あまりのあるわり算～」</p> <p>○全員が自分の考えを書いていた。式だけでなく、図を描いたり式に単位を書き加えたり、わかりやすいように工夫していた。</p> <p>○学習リーダーが、他の児童に答えや解き方を確かめながらまとめを行い、自分たちで問題を解決するところまで進めていた。</p> <p>▲問題文の文言だけにとらわれず、問題場面を理解し、立式や答えの意味を考えて解いていけるようにしたい。</p>
	<p>算数科（4学年）「およその数の表し方と使い方を考えよう～がい数の表し方と使い方～」</p> <p>○問題場面のイメージをもち、自分の考えを理由も加えて書き表すことができた。</p> <p>○学習リーダーがみんなの考えを引き出しながら話し合いを進めていた。なんとかして自分の言葉で伝えようとしていたり、相手の意見に対して考えを伝えたりしながら話し合いを進めている姿が見られた。</p> <p>▲話し合いが停滞する場面があったが、複式授業のため担任が入れなかった。複式授業で進めることを考え、直間指導の組合せ、提示資料の吟味、滞った話し合いを進める時のヒント等、自分たちでできるための手立てをさらに考えていきたい。</p>
五年	<p>算数科 「単位量当たりの大きさ～比べ方を考えよう（1）～」</p> <p>○課題を解決するための方法や調べ方などを自分で選択することで、一人ひとりが見通しを持って意欲的に取り組む姿が見られた。</p> <p>○一人ひとりの考えをグループ交流で出し合うことで、一人では気づかなかった考えに気づいたり、「なんで？」と気軽に友達に尋ねたりして学びを深めることができた。</p> <p>▲全体交流の場でも、友達の考えと比較しながら聞けるようにしたい。</p>
六年	<p>算数科 「割合の表し方を調べよう」</p> <p>○教科書や自分のノートを活用して、課題に取り組むことができた。</p> <p>○一人ひとりの考えをグループで確認し、アイデアを出し合いながら、答えに近づいていく話し合いができていた。</p> <p>▲考えを図や式で表すことができたが、その数字が何を表しているのか理解できていなかったのので、図や式に言葉をつけて説明ができるようにしたい。（可視化）</p>
きょう から （五年）	<p>社会科 「くらしを支える食料生産」</p> <p>○地理的な問いかけに対して県名とその位置や特産物をつぶやくなど、既習内容と関連させながら発表する姿が見られた。</p> <p>○くらしの写真を白地図に貼ることで食料の生産地を視覚的にとらえることができた。</p> <p>▲地図帳の巻末資料や図書の書籍や資料を活用し、その中から必要な情報を選択したり収集したりして処理する力も育てていきたい。</p>

IV 成果と課題

- 本時の流れやゴールを明確にした授業づくりをしたり、学習の積み重ねがノートや教室の掲示物にあり、それらを活用したりしたことで、見通しを持って課題に取り組むことができた。
- 学級が落ち着いて、何でも聞き合える人間関係が土台となって、思いや考えを出し合うことが多くなった。友達の発言に耳を傾けて、聞いて反応してくる子どもの姿も見られた。
- ▲自分の思いや考えを友達に伝える場を積極的に設定することができたので、「伝える」だけでなく、「問い返し」を通してさらに話し合いを深められるようにしたい。

(布川 美智子)

あ と が き

今年度からスタートした第7次山形県教育振興計画のキーワードの一つに、「挑戦」が示されています。本研究所の事業についても、昨年度までには実施されていなかった新たな取り組みも含め、たくさんの挑戦がありました。

まず、夏の半日研修会については、町の全教職員が谷地中部小学校に参集し、小学校では学年部会を企画し、学校の枠を超えて同一学年の担任同士が情報交換・意見交換を行いました。小さな挑戦かも知れませんが、参集型から生まれる一体感やチーム感、同一学年を担当しているという仲間意識や同僚性など、顔が見える関係性を築くことができたことの効果はとて大きく、令和13年度に迎える小学校統合に向けた大切な一歩であると思います。また、中学校部会では、県立谷地高等学校の黒木校長先生を講師に迎え、高校入選に向けて中学校に求められる対応についてご講話いただきました。これも高校入試の仕組みが変わることへの中学校としての挑戦と言えます。

次に、各研究部会並びに専門部会については、本町が抱える課題や各部会で取り組まなければならない課題の解決に向け、テーマを明確にして研修や情報交換・意見交換に挑戦しました。各部会とも充実した内容で大きな成果を上げただけでなく、来年度以降に繋がる大切な課題も明らかになりました。

それから、河北中学校の公開研究発表会においては、3名の教員が、音楽、道徳、社会の授業提案に挑戦しました。中学校教員の専門性と深い教材研究に裏打ちされた授業を参観することで、各校の教員が自身の授業デザインを見直す機会を得ただけでなく、小中学校9年間の義務教育の出口となる中学校3年生の姿を共有できたことは大きな学びです。

さらに、本町の大きな課題の一つである学力向上に繋がる授業改善を図るために、授業研協力ネットワーク作りに取り組んだことも新たな挑戦でした。授業デザインを構想するにあたり一人で悩み抱え込むのではなく、一緒に考えて欲しい、協力して欲しい教員に自ら声をかけて協働的に授業力を上げていく取り組みは、教員一人一人の主体性と自立心を育てることに繋がり、西村山地区の先進的なモデルと言えます。それに加え、町教育委員会のお二人の指導主事が「授業を考えよう会」をシリーズ化して開催したり、積極的に各校を訪問し授業参観と事後指導を行ったりしてくださいました。

今年度の町校長会の運営方針が、「前年度踏襲や現状維持は後退、攻めの校長会に」でした。その運営方針に沿う形で、本研究所の事業も挑戦を積み重ね、この紀要にはまさに攻めの内容ばかりが記載されています。明らかになった成果と課題を整理しつつ、来年度以降も挑戦そして攻めを大切に、事業が展開されていくことを期待しています。

結びになりますが、本研究所のためにご指導・ご助言を賜りました河北町、河北町教育委員会をはじめ、本研究所の事業の準備・運営にあたってくださいました全ての教職員の皆様
（副所長 秋場 一憲）